女學雜誌

第二百三號目次

社説 ウイラード、レビット、アッケルマンの三女史○閨秀大詩人

論説 當時の壯士○時勢に感わり

批評 新著百種第八號○新島襄君は基督教信者なりし乎○國民新聞の眞面目○彼の小年を如何んせん○ゆにてりあん○禁酒雜誌

雜録 獨逸國通信○懸賞答文○輿論必しも是ならず○上州紀行○其磧の手代氣質○貧乏の原因○きよめぬ庭

小説 浮世の波間(七)

寄書 婦人と文學の未來○ペルッ先生の存娼論○肥田野八重子の履歴○祖君の教へ秤の譬へ○竹の一ふし

開書 天下同胞に訴ふ○交詢

時事 女學生の風聞と、日本、讀賣の二新聞○アッケルマン孃○一陽來復、新聞、批評、小説、雜誌、廢娼記事

女報 皇女御對顔○東京養育院○岩村都子○ヒックス女史○櫻井女學校○婦人衛生會○竹村女史○男女共學の學校○女職工の協會○大學卒業女生會○大學女醫學生

"It is by women that nature writes on the hearts of men."—Sheridan.

此書は子供が見て面白く、女が見て爲になり、學者が見ても感心する、珍らしき訓蒙繪双紙なり、趣向新らしく彩色目ざましく、特に文章は歌の如く誰にも讀めて味ひ無限なり、實に子供にも、細君にも、學者にも珍重さるべき書物なれば、御褒美、遣ひ物、などに最もよし。一冊十錢、郵税二錢なれど女學雜誌の讀者に限りて一冊九錢にて送り參らす。

三月八日發兌　第二百三號　一冊定價六錢

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 203. 8TH. MARCH, 1890.

EDITORIAL:—Willard and Ackerman, and Mrs. Leavit. Need Great Poetesses.

LEADING ARTICLE:—Modern "Soshi" Thoughts on the Present time.

CRITICAL NOTES:—Review of "Shincho-Hyakushu," No. 8. An Answer to the Question "Was Mr. Niijima a Christian?" True Aspect of the *Kokumin Shimbun*. What shall we do with that youth? The *Uniterian*. The *Temperance Journal.*

MISCELLANEOUS:—Correspondence from Germany. Prize Essays. A Public Opinion is not necessarily Correct. Recollection of a Trip to Joshu. Review of the "Todai Kishitsu" by Kiseki. Cause of Poverty. The Humorous.

OPEN LETTERS:—

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百二號目次

社說 今日の女子、政黨に入る可らず〇幾多の非廢娼論(讀賣新聞を駁す)

論說 「つぼみ」雜誌を讀みて感を記す

批評 女子參政權の辨難を評す(旗泉子)

雜錄 〇毛糸編物教授本〇帝國議會要論雛かざり〇新島襄先生の歌〇想夫憐の解〇貧乏の原因〇赤子に飮ます乳〇新工風寫眞版〇女生徒圖分表〇亡き姉君を想ふ〇きよめぬ庭

小說 イナック、アーデンものがたり

寄書 武藏野〇失意歎〇今樣お姫樣の御勢揃〇日出る遠の歌〇讀賣新聞女生に關する記事を讀みて

閑書 愛する諸姉に申します〇閨秀の寫眞〇交詢

時事 女學生の風聞〇風聞の出處〇出處の製造元〇よし之ありとするも〇社員、アッケルマン孃を訪ふ〇谷將軍の女論〇廢娼記事

女報 貴婦人法話會〇東京府高等女學校〇外國人の存娼演說〇娼妓の數〇山口高等女學校〇園部婦人會〇寄松說

WOMEN IN JAPAN.

(1) *On the afternoon of the 1st of this month, Miss Ackerman spoke to some 800 audience at the Kosei-Kwan, in behalf of the members of the Women's Christian Temperance Association and of the Women's White Ribbon Club. Her topic was the "Midnight Sun in Alaska." The money realized from the sale of tickets after deducting expenses was contributed by the above members toward her travelling expense. This week she is speaking every day at Yokohama, and the next week she is giving to speak at great many places in Tokyo. Audience is admitted free.*

(2) *At a general meeting of the Women's Health Society, held on the 1st inst., it was decided to publish its journal monthly, from April, instead of publishing it once in three months, which they had been doing.*

(3) *From 2 o'clock P.M. of the 15th inst., Dr. Eby, and Messrs. Uchimura and Tamura are going to speak in favor the abolition licensed prostitution at the Azabu Methodist Church, newly built.*

(4) *Dr. Baelts of the Medical College spoke on the 22nd ult., at the lecture hall of the first Koto-Chiu-Gakko, in favor of the Licensed Prostitution.*

(5) *In Yamanashi, Yanagawa, Yamagata, Fukui and few other places, associations were recently started which aims at the Speedy abolition of licensed prostitution.*

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第二百三號

明治二十三年三月八日發兌

社説

ウイラード、レビット、アッケルマンの三女史

人若しコロムバスが新世界を發見せしを偉なりとせば見よ茲にコロムバスよりも偉大なるものあり、人若しアレキサンダー、ナポレヲン等が王國の廣りしとを驚かば見よ今日彼處に之よりも廣大なるもの設けられたり、夫れコロムバスが大西洋の岸頭に立ち徐むろに清風に嘯ふきて端なく慨斷し布衣一書生の身を以ちて列侯に説き遂に船三艘を裝ほふて茫々たる大洋海に乘出せしとき、彼が磁石の指示する所は何處の世界なるやを知らず彼が率ゆる所ろの水夫は何時彼自身を水に葬らんとするやを知ず、一天蒼々、万碧茫洋たり、深夜人眠り風をどろかすの時、仰いで天の星の稀なるを見、北斗の轉たゝ歸路を指ざすが如きとき、彼が信ずるところの者は唯だ一の自己ありしのみ。アレキザンダー、ナポレヲンの輩亦た絶倫の大王とす、万馬千軍を思ふまゝに指揮し、征ところ草をも威服し、戰ふとして所領を加へずと云となし、或る時は當に奪ふべきの地絶へなんとを憂ひ、又或る時は我れに逆ふべき勁敵なきを物足らずとなす、實に是れ人間中最大の怪魔なりしとは云へ、其膽の大ひなる其勇の壯んなると亦驚ろくべきものありしなり。左れど今ま吾人は此等の驚くべきものよりも更に驚くべきものを見たり。

茲に一錢の金を携へず、一人の友を伴わず、一個の迎ふるものを待たずして、單身全世界を周遊し、到る所ろに福音を宣傳主張し、同主義の人を滿天下に糾合して坤輿に一の大ひなる帝王國を打建るものあらんには、其功業の凡ならざると啻にコロムバス、アレキザンダー、ナポレヲン等の比にはあらず、若亦た其到る所ろの面積の廣大なるより言わば、マルコポロも、太閤秀吉も、リビングストンも、シーザーも、フランシスザビーも尚ほ之に及ばざるとを見るべし、而して此の最も大ひなる遠征家は、兵を率ひしにあらず、權を弄せしにあらず、只だ誠忠に動くところの舌一葉を以て地球上の滿面に遊説し、而も其身は甲を着けず、刃を握らず、優々として貞淑なる一婦人にてありしと云ふときは、天下の驚ろくべきと夫れ何者か之に若かん。

此言或は奇に似たりとなす者あらん、然れども人若フランセスウイラードが其所領を滿天下に有しクレメントレビットが

全世界に遠征し、ゼッセーアッケルマンが今ま第二の遠征使となりて地球上の万國に遊説するを見ば、夫れ安んぞ吾人が言ふ所ろを非なりとせん。

ウイラード女史嘗て西遊し、太平洋の濱邊に立ちて遙かに日本より來るの微風を吸ひ、卒然初めて意を決して万國に禁酒の傳道を爲さゞる可らずとなし、之をレビット夫人に謀る、夫人亦た大に慷慨し、別に備ふる所ろなく極めて靜かに本國を出發し、「金または銀または錢一錢を貯へ帶ることなく、行囊を二つにせず下衣を二枚にせず」、飄然一舟に托して先づサンドウイッチ島に渡り、初めて禁酒事業の基礎を置きて遂に今日あるに至らしめ、次にニウジーランドのアウックランドに渡りて十一の禁酒會を起し、次にシドチーに渡り、又たニウサウスエールスに二つ、クインスランドに五つ、タスマニアに二つ、メルボーンに一つの禁酒會を起し、次に南アウストラリアに渡りて非常に人心を撹醒し、次に我日本國に渡りて彼の幾多の矯風會及び禁酒會の首石となり、次に支那に渡り、北京、天津、上海等に强大なる禁酒會を起し、次にサイアムに渡り、バンコック、ペチヤブレーの二ケ所に禁酒會を起し、次にシンガポールに渡り、次にブルマに渡り、次にセーロンに渡り、マダガスカルに渡り、其他到る處ろに或は王公に説き、或は蠻民に勸め、或は禁酒會を起し、或は禁酒請願書に調印せしめ、今や殆んど全世界を一週し盡して將に本國に歸らんとす。

此時に當りて亦た第二のレビット夫人出で來れり、之を現に我國に滯在するゼッシーアッケルマン孃となす、孃は去年一月米國を出立し、既にハワイ、ニウジーランド、タスマニア、アウストラリア、シンガポール、サイアム、南支那等を經歴し、到る所ろ禁酒會の勢力を助長補綴して第一遠征使の功業を大成せんとす、今や我日本國に來り、此一週間は横濱に於て晝も夜も演説し、次の一週間は東京に於て日に二回以上の演説を各所に於て催うさるべし、熱心火の如く好氣水の如く膽勇金鐵の如し、而して此の二人の遠征者は其本會より一錢の金を受くるにてはなく、亦た其身に巨万の財らあるにてはなく、只だ便に隨つて時々入場劵を要するの演説を催うし、其餘金を用ひて僅かに路費を支給するものなり、彼等が信ずる所は下の如し、云く「爾曹價ひなしに受たれば亦價ひなしに施すべし、旅天うれひるとなかれ、働らく人の其食物を得るは宜べ也」と。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

斯てウイラード女史は万國共和邦の大統領となれり、其所領には日の沒するときなし、斯てレビット夫人、アッケルマン孃は全世界の傳道者となれり、古來未だ一人も如此きものあらず、而して彼等は皆な婦女子あり、いかめしき婦女子にはあらず只だ誠忠博愛に感じて動く所ろの眞の女あり。

世人ナポレヲン、コロンバス等の事業を大なりとして今ま之よりも大ひなる事業の眼前に横はるを知らず、而して此の最大なる事業の實は婦人の手によりて成れるとを知らず、あゝ婦女子あに爲すとなきの動物あらんや。

閨秀大詩人

ホール、マコウレーの徒、詩は古へに及ばずと論ろひ、世の文化に進むに連れて歌よむとは漸やくに廢れゆくと思へり、支那の詩人、我國の歌人亦た大率ね斯る見識を立て、ひたすらに古へを慕ひて詩歌は世々に衰ろへ行くと思へり、東西轍を一つにするの誤まり如此く甚だしきはあらず。

古への傳説に云く、アダム、イブ智恵の木の實を食ひて墮落したりと、實に人の邪路に迷ひ入ると多くは智慧に高ぶるが爲めなり、若し眞の智慧にてあらしめば智はよく人を導びくのものたり、左れば半ば學びたる族らの往々才に誇りて身を誤まるが如く、究理半通の時世は屢ば人心を暗ますとあり、此を以て世は信仰に初まりて疑ひに入り遂に復た信仰に復へる、人の幼けなきや只だ信任す、長じて物心つき學校に入りて彼此と學ぶ比ひは天下の万事皆な窮むべしと思へり、而して學を畢へ業に就く時に至れば万理總べて暗らく只だ信仰の頼みあるとを悟る、總じて初めは無學者の信仰とあり、中比は研究者の疑となり、最后は賢明者の信仰となる、日出て沒し、水流て海に入る、人心は終に信仰に歸すべきなり、スペンサー曰く、學は夫れ黑版に白點するが如きか、點いよ／＼大なれば黑に接するといよ／＼大ひなりと、ニウトン、フハラデー、パスカル、等の學は何によりて深きか、彼等益々人智の淺きとを知れり、此を以て其學の深きとを知るあり、嗚呼一切を知ると云ふものは何事をも知らざるものなり、信仰を愚なりとするものは其の愚ありとするの立論も何ほ脚地を失へるとを知ざるあり、万卷を讀破すれば遂に一字に歸す、人智そも／＼何如ん、たゞ信仰に達せんとするのみ。

夫詩歌は信仰の聲なり、信仰切なるの時代には大ひなる詩歌出で、信仰切なるの人には大ひなる詩歌成る、胸中餘地を存

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

せず兀々として理に併するものは大率ね歌よむと少なし、歌はさら〳〵として論そはぬがよしと云ふもの即はち是れ也、之を以て、ホーマア、シエクスピア、ダンテ、ゲーテー等、四の大詩人は皆な理解せずして信仰せしものなり、たとひ理解すとも一片雄厚の信斷々として胸裏に固結す、時あつて炎上烈火となり、時あつて冷靜寂々泉流の流るゝが如く細しと云へども、其信仰や常に絶ゆるとなし、故に詩歌は大率ね敎會に伴なひ、亦た音樂に交はる、敎會と音樂とは亦た是れ信仰の器にして詩歌と共に人を安んずるの道なり、人間もし誇りて自ら高ぶり敢て理解すと云ひて万事を疑ふときは、懷疑の說妓に跋扈し、唯物の論妓に横行し、四面暗黑にして、靈性永遠の希望全く絶す、此に於てか音樂は其音を失なひ、敎會は其信徒を失なひ、詩歌は其のうたひ手を失なふ、則はち之れ人智邪路に入るの境界にして万事信仰を欠の時とす、人一生の中ち必らず此の時あり、人世の進路亦た必らず此の時代に會す、是れ人智半通し開化半ば開くるの機なり、論者此を目して詩歌衰ふるの世となす、眞に然り、然れども其衰ふるは正に進むの基ひにして異日大詩境に達するの輝光すでに此時に漏れたりと云ふべし。

人は信仰に達して始めて休し、世は信仰に達して初めて安息す、而して信仰の尊ときとは其の終りに達したるときに於て尊きにあらず常に尊ときなり、特に万界暗く四方悉とく疑ふの時に於て尤も尊ときなり、故に詩は其の隆んなるの時に尊とむべきにあらず、其の衰ふるの時に極めて尊ときなり、世人局促として下天に理屈偏僻するとき、超卓秀逸の詩歌大ひなる信仰を表わして高く淸吟さるゝときは、万疑霧のはるゝ如くに晴れて日輪赫明とならん、幻燈は暗き部屋に於て尤も美くしく詩歌は暗黑の時代に於て特に効あり（"Magic Lantern acts best in a dark room; Poetry effects its purpose best in a dark age". Milton.）

詩歌の最も衰ろへたる時代は詩歌を要するとの最とも切なる時なり、然れども詩歌の最とも衰ふるは研究の専ぱら行れて人智唯物論に流るゝの時あるを以て、其の智に併するの人に向つて其の情を以て慰さめよと云ふと能はざるが如く、詩歌極めて衰ふるの時勢に向つて汝ぢ詩歌を吟ぜよと云ふと能はず、此時に當つて只だ賴むべきは即はち天然の詩人なり、而して婦女子は即はち天然の詩人たるなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

彼は理解するよりも直覺し、解剖するよりも綜合す、故に其人を動かすは彼が議論にあらずして彼が歌ふときにあるなり、婦女子堂々として演説するとき吾人必らずしも感ぜず、然れども誠心至り其吟ずる所ろを聞けば、未だ腸を斷たずと云ふとなし、好し詩歌の効德を疑ふのアウロラ、ラムチー、と云へども、男はヘッドにして女はハートなり世はヘッドとハートとの二つ共に動くべしと云はざるとなし、而して世を温たむる婦女子が愛情は發して詩歌の聲となるものなり。之を歌ふときは「あめつちを動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男と女の中をも和らげ、猛けき武士の心をも慰さむ」、豈に唯だ之のみならんや、疑ひに沈める魂しひも之を聞けば感謝し、敵を刺さんとするの刄も之を聞けば接吻すべし、歌は靈魂の聲なり、愛情の聲なり、感謝の聲なり、親睦の聲なり、其聲きこゆる時は貧しき者の顔ばせも花の如く、なり、苦しむ者のうめきも讃美となり、のろふ者の怨みも化して愛戀となる。

見よ今日の日本は何如なる世ぞ、國會の將に開けんとするは同胞の將に爭わんとするの初めなり、スチッキも之より或は刄となるべし、演説も之より或は毒舌となるべし、若し政黨上の異見戸毎に入り來るときは、子は父に反き兄は弟に離れ一家親戚三々五々に別れんとす、夫れ此時に於て之を和らぐるもの歌にあらずして何んぞ、而して此歌を歌ふものは婦女子にあらずして何人ぞや。

夫れ名句を吟ずれば羅生門の鬼も之に和すべし、誠なき夫も心を改たむべし、敵するものも顧みて一笑すべし、此等の美談澤々として詩歌の歷史に滿てり、今日の詩歌亦た安んぞ同じきの効能あらずとせん、世は亂れて洪水來らんとす、同胞は互ひに爭ふて決鬪せんとす、父兄同族は皆な離れんとす、此時に當りて婦女子なんすれば亦た理屈を述べて火上に油を添ゆべけんや、諸君が捧ぐべきものは涙のみ、滴々の涙もし集るときは能く烈火を消すべし。

故に吾人は信ず今年は詩歌大ひに起るべしと、何んとなれば今年の如く詩歌を要すると切なるの年あらざれば也、然れども吾人は只だ信ずるのみにあらず實に然あらんとを祈るものあり、同好の姉妹請ふ志を同ふして如此く祈れ、明治二十三年に大詩人出でよ、而して其大詩人は婦女子より出でよと、而して如此き大詩人たらんとするものは、必らずや信仰あつく、道德淸らかにして、民を愛し國を愛ふるの心切なるもの

にあらずんば能わず。

The pale moon is setting beyond the white wave,
And time is setting wi' me, O.　Burns.

論　說

當時の壯士

花妹寄

諸士よ妹は諸士が洒落にして執拗ならざるを愛せざるに非るなり諸士が時事を慷慨して胸襟の鬱積に勝へざるを察せざるに非るなり諸士が進取の勇ありて退失の怯なきを稱せざるに非るなり諸士が身を顧みずして國を愛するの親切なるに驚かざるに非るなり之を概言すれば妹は諸士を敵視するに非ず寧ろ愛視するなり左れど之をフランクリーに放言すれば迷惑視せざるを得ざるものあるを如何せん諸士洒落なるの故を以て無禮を沈思の人に加ふるの特權を有するか諸士時事を慷慨して鬱積に勝へざるの故を以て徒らに暴言暴行を爲すを得るの特權を有するか諸士は立憲政體を希望し玉ふに非ずや諸士は言論の自由と集會の自由を並に希望し玉ふに非ずや近時諸縣の演說會に於ける諸士が擧動は何事ぞ辯者を演壇より牽倒す如き之を路に要する如き天保錢を面部に投ずる如き棍棒を與ふる如き茲に甲黨が演說の計畫あれば乙黨既に之を打破するの策あり之が策を達せんとするには富者爲に財を投ずるを吝まず腕力家爲に身を傷つくを顧みず財あり之を招き力あり之を助く何ぞ策の達せざるあらん之が爲めに財を投ずる者恰も公益の爲め金を投ずる如く考へ之が爲め身を傷く者亦國家の爲め身を致す如く誇る嗚呼何の事ぞ乙黨の演說あるを聞くや甲黨又之に報ふるに同手段を以てす初め之が端を開く者素より不可なり然ども之に報ふる者亦不可ならざるに非ず諸士よ斯の如き擧動を以て猶立憲政體を希望すべきか猶言論集會の自由を希望すべきか諸士は天賦拔群の氣象を具ふるものなり否らざれば時事を慷慨する此の如くなるを得ず國家を愛する此の如くなるを得ず諸士血氣に左右せられて流行癡を學ぶに非れば諸士が國家有益の士たる信じて疑はざるなり妹は深く諸士の爲めに惜しまざるを得ず筆を馳す茲に敏ならず諸士を懐ふ茲に深し文中不敬の言あらん諸士妹が赤心のある處を察して漫に言辭を咎むなくんば幸矣。

不實な傭主　或る商家にて一人の男を傭ふ時お前が約束通り勤めさへすれば店をだしてやるし、資本も貸してやると云て居ながら其男が勤め上げるや否や平氣な顏で「アノ時はア丶云たもの丶人の云ふことは時々かわるものと思いなせ」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○時勢に感あり

透谷廬人

君知らずや人は魚の如し、暗らきに棲み暗らきに迷ふて寒むく食少なく世を送る者あり。家なく助けなく暴風暴雨に悩められ辛ふじて五十年の歳月を踏み越ゆるなり、過ぐる日見し門松は果して吾人を祝せしか將た吊ひしか、泣いて一暮を明かせしもあらん、笑つて新年を祝せしもあらむ。吾れ禮を知らず常服を着け彼方此方を見舞ふに、賢こい乎彼等皆な酒杯を手にし、枉げて豪興を裝ひ胸中の疑惑と恐懼と鬱怏とを散じ去らんと企つる、誰れか汝等に敎へて斯かる無邪氣の罪を搆へしめけん、人よ汝等が斯く裝ふて自らを詐き合せて他をも欺くは自然なり、吾れ敢へて咎めず。然れども吾れ不幸にして憤慨多し、何の吾れを怒らすある、何の吾れを苦しむるある、吾れ自ら知らざるにあらず、而も言ひ難きあり、天果して我が民を左くるか天果して吾が民を詛ふか、紛々擾々たる社界の現象を一括し來り詳かに是を觀察すれば熱涙の期せずして吾が雙頬を掩ふ者あり、嗚呼吾が民、戒心する所あれ。思へば何にが故に文學家を要する、何にが故に政治家を要する、何にが故に僧侶を要する、卑劣なる戀情を解釋せしめんとするにあるか、狡猾なる私榮を求めんとするにあるか、袈裟を着若くは抹香を薰せしめんとするにあるか。

嗚呼豈に然らんや、憤激して起つ可き社界は汝が眼前に横はらずや、區々戀愛の説明吾人是れに傾める事久し、些々たる一代の榮聲を求めて咄々何の狹隘なる、汝が前に紛粹す可き惡組織の社界あらずや、頭を圓ふし香を燒き、笏を振りて汝何者をか救はんとする、嗟吁汝が筆を拾てよ、汝がスペンサーの譯書を投げよ、汝が袈裟を脫ぎ去れよ、今日はペダントリイの縱横すべき日にあらざるなり。

傲然として言ふ者あり吾れ國を愛すと、其妻は明朝の食を憂ひ、其娘は誓ふ事久ふして未だ嫁する能はず、一壺既に盡きて他を呼ぶ、妻逡巡して起たざれば彼れ足を擧げて蹴る、彼れが政談を爲す時は一個の愛國者なり、彼れが家庭に歸る時は既に一家の破壞者、一國の破壞者たるを甘んず。

慢語する者あり、吾れ文學世界の一王なりと、悟る所何にかある、憤ふる所何にかある、敎へんと欲する所何にかある、佳公子よ君が顏は紅ひなり君が眼は清やかなり君が口は可愛らし、然れども漫々たる宇宙の大眞理は君が前む方にあらずして君が後にあり、君が理想し出し玉ふ美人は好し君が掌中の物なる可も何んぞ神女來つて君と遊ばん、何んぞ天使來て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

君と笑語せん、君の手は惡魔を拒せぎつゝあるを擊たんとしつゝあるか將た君が全躰は彼れが掌上に醉臥しつゝあるか。

吾れ行き行いて市街を過ぐるに、悲しまざる者はなし、憂ひざる者はなし、悲しみ憂ひを隱蔽せんが爲め再び悲しむ可き憂ふ可きの罪を構へつゝ更らに又悲苦慟哭すべきの事を爲す。

日に月にドンーフたらん傾きあり、日に月に支離滅裂せんとするの思ひあり、吾れ豈に杞憂せん、唯だ恐る熱腸なる者徒らに憤ふり冷腸なる者時を得顏に蹂躙し盡さんとするを。

若年の文學家よ願はくは怒る事勿れ、吾れ曾つて公等に歡樂者の號を奉りし事あるを記臆せらるゝか、嗚呼歡笑するか歡笑するか、吾れ公等を羨まず、此の世は歡笑す可き所ならず右に左に暗々擲々不幸を喞ち非過を嘆ずる者幾百萬かある、行いて彼等を慰藉し玉はずや、彼等が求むる所は公等佳公子が驕傲罵倒し去り冷笑し去る事に非らずして一滴温たかき涙を以て彼等に同情を示めすにあり。嗚呼榮利を賴のむ政治家よ、昔者アレキサンドルと呼ばれし頑童が地球の二つなきを苦しみて泣き明かせしを聞けり、公等曷んぞ空々たる瞬時の榮名を追ひて疲勞するや。

蓋し冷やゝかなる腸多くして涙を含める温たかき腸は求むるとも得ず、家なく食なき茅の家の住民恨み日に切あり、彼等知らざれば天を恨み地を罵る、志しある者少しく戒しむる所あれ。

批評

新著百種第八號

雪　峯　子

一、芳李

本篇は一種の人情小說にして其主眼とする所は新著百種得意の涙なり主人公は歸鮮者の嫁ふ所の若年の男女なり先つ老人野獸に逐はるの危難に始り涙の中に憂苦の境界を迷ろ少年の心事穿ち得て神に迫ると云ふにはあられと先つ可也と謂ふべし爾後芳李（主人公の一人なる少女）は美呂（主人公の男）に助けられ日暖かに風靜かなる幸福快樂を享受するかと思ひの外乍ち吹き來る腥風乍ち降りくる酸雨或は爆烈彈の破裂となり滊車ために轉覆し數十の人命立ろに烟と化し或は野戰の砲擊となり血河屍山の慘景を現す其他山の難水の難災々主人公の身を纏ふ實に讀者をして迅雷疾風耳を掩ふに遑なきの感あらしむ殊に戰場の景狀を寫すの一段は作者が最も筆力を込められし所にして讀者も最も佳境と思ふなるべし然れど經國美談の隆具の戰爭に比すれば快味劣る事數等なり本篇に於て見るべき所は其着眼なり敢て高尚なりと云ふにはあられど主人公等の愛を寫す甚た潔白なり是蓋し美呂は芳李を憐むより芳李を愛するに至り芳李は美呂の恩を感ずるより美呂を愛するに至りしに由るなるべし余は斯る潔白の小說が出てたるを喜ふ者也全躰の趣向左程新新と云ふ可らずと雖も亦近來ありふれたる男女相愛の陳腐なる趣向に陷らず先づ近來珍しき趣向と云ふも可ならんか既に我國に於て斯の如き若くは斯に類似したる趣向有し故にや作者は殊に場所を外國に撰ばれたり御注意周到の程は察し奉れ共惜むらくは讀者悉く外國の事情に通ぜざるが爲め少しく帽を隔て頭を搔くの感なき能はざる事を若し是を我國の出來事として源平の戰爭の時とか若くは西南戰

爭の時とかせば讀者を感ぜしむる事一層深からんと思ふ如何偖本篇中余の滿足せざる所及び不審の點を少しく摘發して作者の教を乞はんとす。

第一美呂(ミロー)が老人の家に至り其娘との初對面に「チヽ可愛らしい娘(こ)だ」と云つて頰を撫でし云々(十頁六行)亦「チイお前いつまで抱れて居るのだ云々」(二十一頁)抔あり然るに娘の年は既に十四歳なりとぞ十四と云へば左程幼きにもあらず殊に初めて遇ひし時に此等は眞にあり得べき擧動か第二「長い艶(つや)ゝな黑髮は亂れて眞白な肩へ懸つて居る所は積つた雪に烏(からす)の翼が落て居る樣です云々」(三十三頁十行)とあり獨逸人の髮は烏の翼に比する程黑きものか將た亦黃金色毛(ゴルドンヘーヤ)なるか第三涙、泣く、哀れ等の字甚た多し例へば六十七頁始の數行の如き「哀れです」「凄い樣です」とか亦危く、命限りになく抔云ふ字殆んど行每にあり斯る字を何程多く並列するとも讀者に悲哀を感ぜしむる能はず直接に現はさずして而して讀者を感泣せしむるを以て巧みなりとなす本篇の欠點一は此にあり第四文章は言文一致躰の特質ゝゝ面白くなき特質を有す思ふに此文躰は必らず後來發達すべきものならん今日に於ては未だ他の文躰に比して面白味少なし然れば本篇も其數を漏るゝ能はざるは怪むに足らず是余の滿足する能はさる諸點なり尙云ひ度事あれども長文に渉るを以て畧す二月末日妄批

二、　小野篁

是は僅か二十頁の短篇にして一種の偶意小說なり只夫れ偶意小說なるが故に余は之を說かず蓋し偶意あるもの若くは諷刺の意を含む文字は讀者各之を味ひ之を解了すべきものなればなりされば余は其意の存する所は措て云はず只文章の點に於て余が感服する事を述ぶるを以て足れりとなす夙に人の知る如く本篇の作者學海先生は新井白石の著書及び春臺雜話の如き文章を好ませられ兼而漢學に博く渡らせらるゝ丈けありてさすがに文章流暢平易讀者をして轉た其短篇なるを惜ましむ實に余輩後進者の學ぶべき文章なりとす余輩淺學先生の著作に向つて是非を判するの力なし故に只一言して止んのみ。

近頃る或る新聞紙に不思議な廣告が出ました、其文に「專賣特許の寶藥秘傳を賣拂はるべき人を要む思ふに其御方にも利益あるべしと。

「峽中時事」と云ふ雜誌の第五號に斯う論じました、昨年中天下の新聞雜誌に先だつて惣べての文學の爲に働らきしものは、新聞では讀賣新聞、雜誌では女學雜誌を推さんと、ちと過ぎるやうです。

前週新誌

○新島襄君は基督敎信者なりし乎

此如き問題を揭げ、「教義」の記者は憚る所なく痛論したり、云く君が基督教を信ずるに至りたる由來に疑ひあり、云く同志社大學を宗教の機關に非ずと云へるとに疑ひあり、云く同志社紛擾の時自ら肉を破りて古英雄の計に倣ひしとに疑ひあり、云く本年迎春の詩に亦抱壯圖とあるに疑ひあり、云く疊の上にて死するを殘念とせしなどの遺言に疑ひあり、云く生涯敵を作りしとなしなどの遺言に疑ひあり、云く一家の事に付きて顧慮せざりしに疑ひありと、言少しく奇矯に失すと云へども能く言ふべきとを言へり。今の新島先生を追慕する士流の一部分には之を敬虔なる基督教信徒としてにあらず寧ろ英雄として崇拜するの人なきに非ず、不幸にして此流の人先生の臨終に陪し只だ己が尤も感ぜし所ろを世に喧傳せるによりて、先生の英雄分子早く世に傳わりて其信徒たるの分子未だ多く世に傳へられず、於此乎遂に教義記者の痛慨を招くに至れり、吾人は先生を以て大丈夫となす、偉男子となす、亦よく日本のものゝふを躰せるものとなす、然れども特に之を愛するは其の謙遜至誠なる基督信徒、即はち本然の人間たるとを認たむるがゆゑ也。思ふに先生の世を辭せんとするや、生平其胸中に鬱沒したる慨念固より迸はしり出でざるべからず、於此乎一種古豪傑古英雄に似たるの言行も亦或は之ありしには相違なしと云へども、特に吾人が注目すべきものは、其の夫人及び令弟に對し、

公義が來りしとて泣いて吳れるな

の一語中實に千万無量の愛情を凝めたるもの並に聖經の句を聽きて莞爾靜聽せられたる等の事狀にあり、聞く先生の世にあるや何如なる日にても何如なる難みの后にても深夜聖經を熟讀し深く祈禱したるとをなくして眠に就けりしとなしと、此れ先生が休み所ろ力の出る處ろ靈の生きし所なり。吾人は尤切に先生の信仰に感ず故に世の先生を敬愛するものも亦た尤多く此點に於て尊重せんとを希ふ、あゝ異日先生の傳を記するものは必らず二人ならざる可らず、先生の英雄分子に服するもの宜しく其一人たるべし、別に先生の靈の分子に服するもの亦之に加力せずんばある可らず。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○國民新聞の眞面目

國民新聞はパルマルガセットに似たり、其の通俗輕快にして窗多く趣味多き所ろ特に肖たり、但だ其の堂々さして氣焔万丈の痛論を爲さゞる所ろ少しく不肖ぶる心地せしが、「女學校怪聞」を論ずるに至りて稍や慰さむる所ろあるなり、云く

吾人竊かに思ふ社會の制裁一方に放縱なれば他方よ嚴酷なるも未だ決して社會德義の進步を見る能はざるべしさ、知らずや貞節は婦人一方のみに於て守り得べきものに非ず、世に若し不貞不義不潔白の男子あらば何如に婦人に向つて貞節を奬勵するも又た何の益あらん、社會は啻に仍りて皆々濁々たらんのみ。

實に然り。

○彼の少年を何如んせん

ナポレオン嘗て冷々さして曰く、彼等さはさたくば騷ぎ廻るべし一朝之に餌を投與すれば唯々さして風從せんさ、彼は實に能く人間の弱點を知れるものなり、時事氣の議論常に此の意味に於て卓詩多し、蓋し詩の卓なるにあらず極めて凡迺なるが故に超出せりとは見ゆる者なり、近頃日々の紙上に掲載せし「少壯生の始末は何如んせん」の社說は、只是れ名譽を社會の各部に分ち少壯者を各部に走らしめて獨り政談に狂うとなからしめんさの主意に過ぎず、くりかへし〳〵平生の宿論を辨ぜらるゝものさ見へたり、云く

歸着實際に行はれず文明の敎育駸々さして進步し貧家の子弟漸く新知識を得て漸く氣位を高め明治元年誕生の兒は本年二十三歲の男子さ成り年旣に長して才學乏しからず唯乏しきは恒の產にして八方に眼を配るも身を寄す可き地位なし樣々に工風を運らして敢て事を好むにはあらざれども其浮沈の際に術ち一時の活路あれば之に走らざるを得ず即ち政務に入り政談に喋々する所以にして勢の止む可らざる所なり。

さ、能く俗咎生の膓を疏ぐるものさ云ふべし、但し今の政治家は政治社界を名譽ありさして自ら珍重するもの也、而して名譽は膨積するほど猶よ名譽なるが故に此の自家特有の名譽を他に分てよさ注文するは則はち汝自ら其名譽を減ぜよさ勸侍するに同じ、俗情を知るものは如此き注文丈けにて滿足し得べからざる筈なり、吾人は此點に於て常に時事氣の說法の不足せるとを憾らむもの也。

○ゆにてりあん　第一號

齊一變すれば魯に至るが故に吾人は吾國にユニテリアン敎の行わるゝを見て賀するもの也、此度其第一號に接して通讀するに目下浮薄片々たる雜誌社會には多く得がたきの眞雜誌にして、眞理硏窮に至大の眞友を得たる心地し喜びに堪へず、祝詞に、加藤弘之、福澤諭吉、中村正直三氏の文を載せたり、之を對視するに三氏の氣想風采ありく〳〵さ現われ、各自特箇の躰類ぶる明白なり、加藤氏は云く、

余は何分にも未だ了解し能わざるものなればユニテリアン敎なるものが實に吾人々類を利すべきものなるや否やの點に至りても何さも判斷を下す能わざる也故を以て余が思ふ所を聊かも隱蔽するなく十分に打明けて吐露するを許さるれば余は今回ナップ君の企てられたる雜誌に付て十分贊成をなすべしさも云はず又全く不贊成なりさも云ふ能はざるの地位に立つものなり、

福澤氏は云く、

…………捉て宗敎の事に至りては祖先累世の遺傳に由るものか何如にも淡泊にして熱する能はず…………

中村氏は云く、

近頃ナップ君に面晤し其論を聞くに從前敎法師さ大に異るものありて余の疑團一半は釋りて消釋したり然りさ雖さも余が今日學問の立足所にては古聖の所云る上帝即ち一の主宰あるを信ずるよ止まれども從來は何如になるべきや譬へば水流の去向の如し東西南北何れに歸着するや預じめ知るさころにあらず。

吾人は何故に矢野文雄氏の文章ぶきやを疑ひ且惜しむもの也。

雜錄

獨逸國通信

家政學は一の學術なり。

左は獨逸國に留學せる太田稻造氏が巖本へ送られたる私信中の一節なり、目下有益の文字さ信ずるに付き元書英文なりしを譯して左に掲載す(編者白)。

拜啓仕候益々御清榮にて高尙潔白なる事業に御盡力の段國家の爲め奉賀候尙何時もなから女學雜誌御郵送被下誠に難有奉存候小生只今は勉學の身に御座候故大兄に御助力申譯にも參り不申實に遺憾此事に候さりなから小生も本年夏には歸朝仕度歸朝の上は女性の爲めに一臂の力を盡し度と存居候小生の修むる學課（農政及農業經濟）は直接に女子敎育と關係無之樣相見へ申候得共小生は一日も此問題を忘却不仕候是實に此問題が人類の自由及進步に大關係を有する事を信ずるが故に御座候されば嘗てベルリン大學に留學中も間暇の時には家政の課業を傍聽致し居りし事に御座候扨て近來之が爲に女學校設置の必要を頻りに相感じ申候。

女子敎育の一事は

勞働社會之問題

と密接の關係を有し候プロフェッサー、ビーメルト氏も兼て此事に就て左の如く申候

勞働社會の問題は實に大切の事項にして人間に譬ふれば胃腑と云はんより寧ろ心臟に關する問題と云ふべし故に女子が此問題に對し好影響を及ぼさん事を希望す即ち世の婦動者とならずして人の母として妻として亦娘として家內に於て社會を益せん事を望むにあり。

女子と社會問題と緻密の關係ある事はドクトル、メーチル氏の言を見て知るべし氏は統計より打算して曰くライプチッヒの市街にある勞働社會中一家に夫婦及び其女子あるものと見做し妻君家に止りて一週間の收入十マーク（一マークは我三十錢に當る）とするも妻君勞働に出でゝ十三マークを得るより立派なる生活をなし得べし是豈著しき事實と云はざる可けんや然るに我國（獨逸）に於ては頻りに製造の業を振興擴張せんとす製造盛なるに從て法律を以て制せざる限りは女子にして勞働をなす者多きに至るは自然の理と云はざる可からず云々。

小生は只今充分の時間無之候故此點に就き小生の考ふる所を陳述する能はず候得共、

プロフェッサー、スタイン氏

の言を此に引證仕度候氏は四海に名聲赫々たる人にして日本の大政治家伊藤伯黑田伯谷子爵の師として敬尊する所に御座候氏曰く

方今澳利太帝國內六百万の戶數にて一年間に費用二千万枚の衣服を着用すると假定し若戶々の妻君にして今日一枚の

衣服を九十日着用するとせば少しく儉約して之を百日着たらんには一年に百三十五万圓を節するを得べし云々。以て女子と國家の關係の重且大なる事を卜知するに足る事と存候小生が曾て大兄の雜誌に書を寄て食物及薪炭の用方を節するのみにても随分儉約を致し得る事を述べ聊か讀者の注意を仰ぎ候も實に偶然には無之候。

女子と國家社會

は斯る重要の關係有之候故女子に家政學を教授するの必要は今更云ふ迄もなき事に御坐候されば當地(獨逸)に於ても上下等社會の女子の爲め所々に女學校有之候小生も斯種の學校を多く觀察仕り我日本に於ても必ず斯る學校を建設せば國家を益する事甚だ少なからずと信じ居候當地に於て右家政學の問題に關しては多くの著書も有之亦當路者は熱心以て斯學の進步を計り居る事に御坐候。

家政學を以て一派の學術となし

候は或は屑とせざる人々も可有之候得共斯る人々は元來家政を以て下婢賤婦の爲す所と認定致し居りしが故と思考致し候小生を以て之を見に是只偏癖の思慮にて恰もリービッヒの時代迄は化學を以て只製藥者の學ぶ所と誤認せしと同じ事と被存候勿論今日に於ては家政學は未だ進步仕らず甚だ幼稚の學術にしてムーデーが米國に於て揚言致し候如く(Domestic Science Laboraroy)の文字を冠するは或は不適當の感なきに非ずと存候得共尚一種の學術と致すは當然の事と存候。

ムーデー氏の言

を述るにつきて思ひ出し候事有之候そは米國に於ける家政學の事に御座候兼て大兄にも御聞きの事と存候が米國のニウヨーク及び其他の大都會に於ては夏期學校を設けて休暇の間下等社會の年少女子に家政學を教授致し候其學校は幼稚園の組織を家政學に適用して教授致し候是甚だ貴き事業と存候亦近來米國に於て家政學の發達せし事は彼の

「サンシャイン、ミッション」

と申す會社の起りしを見ても相分り申候此會社は數月前設立せしものにて其目的とする處は國內の下婢を教育するに有之候御推察にても分り候如く米國に於て下婢を得難き場合にては止を得ず米國風の家政に不案内なる愛蘭土人若しくは獨逸人を雇ひ入るゝことと屢にて御坐候斯る次第なるがゆゑ家政學の問題は社會と必要なる關係ある事明白に御坐候統計表の告る所によれば紀元千八百七十七年より同じく八十六年まで

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の十年間に於て米國へ移住せし下婢は實に十五万人に下らずとまうしそろ先きの「サンシヤイン、ミツシヨン」にては高尙なる家政學を敎授するの學校を設立し其卒業生は貴族社會の需用に應ずる爲めに御坐そろ斯る種類の下婢は勿論高給を受る事と存じそろ此の會社は實に高尙なる目的を有し

下婢の職分を高く

し家政學を一の學術となさんと致し居候之に付て申度事はベラミイ氏の事に御座候氏は其著書(Looking Backward)に於て黃金時代には下婢の地位を他の職業と同等に致し候此書は日本にも送輸しある事と存候。

歐洲諸國に於て家政學の方向に就き尙陳述仕度候得共其事は此に畧し申候されどよく「ホーム」の必要につき尙一言可仕候苟も高尙なる感情を有せば何人と雖も眞誠の幸福、潔白なる快樂は必らず其「ホーム」に存する事を疑はさる可しと存候然し其ホームを成すには整頓せる家庭を要する事に御座候只に屋瓦杜壁のみにては家庭と申す可からず整備調頓せる家庭ありて此に始めて眞誠の「ホーム」を見る事を得べく候今日我日本の狀態は果して如何と云ふに種々の欠點有之候故斯る「ホーム」を作る事は今日に於ては到底六ケしき事と存候人民一般に政治思想も發達し家庭の中の德義に注意致候得ば大に國家の爲めと存候小生の見る所を以てすれば今日に於ては國家に關し社會に係る大事業に重きを置く甚だしくして一家內の德義に至つては恬として顧みざるかと存候人口を開けば則ち天下と云ひ國家と申候得共天下の本は國にして國の本は家にあり家の本は身にある事と存候然れば一個人の事家內の事に深く注意せざる可からざる事と存候。

家庭と國家の關係に就ては聊か小生も思ふ所有之候得共餘り長文に渡るを以て此に申上ず候何れ他日歸朝の後拜顏を得て申述べく候。

意外に長文に相成候若斯く長文に渡ると始より知れば一篇の文章となして大君の雜誌に投寄仕るべきにと、今更遺憾の至に御座候(下略)。

岩本善治樣　（元太田）新渡戶稻造

右書簡は流暢簡明なる英文に御座候得共拙き筆を以て譯出致し候故原文の妙味は殘り不申實に〳〵新渡戶君に對し亦讀者諸君に對し深く謝する所に御座候三月二日譯者みれ子誌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

JOY TO THE WOMAN

懸賞答文

女學雜誌第百九十九號に左の二つの題に對して答文を募りました、

甲　女學生初めて家を持ちての經驗

乙　ホームを美くするに付ての經驗

〆切を二月限と致しましたが、思の外多く答文を得ました。一々通讀して左の三つを最上の者とし之に上中下の等を定めて預約の如く報賞を差出します、

上　神戸さほくめ女史

中　市ケ谷田町一ノ十五番地　相女生

下　京都市伏見新町五丁目　中西伏見子

下點髓聞

伏見子

謹啓　今般廣く御試間相成候「ホーム」を美くする云々に付きては嘸かし全國讀者方より感佩措く能はざるの實驗談澤山蝟集致され候事と確信仕り候就ては右等御揭出の日を今より指折り樂み申居候左り乍ら此儀に付きては私にも多少經驗なき事にも御坐なく候へば聊か記して御覽を願上候。

「ホーム」と申せば住居、生活、暮し、に候へば美なる「ホーム」とは氣樂なる住居、幸福なる生活、愉快なる暮しなる事は勿論と被存申候就而此美なる「ホーム」は何人が形り得られ申す可き事に候哉馬車手車を驅つて銀坐街邊を上目で見歩くの人が必ず得らるべき事に候へば家に妻君の姉、妹を招き寄せて涙乍らに物語する下より辛抱〳〵と聞ゆる譯も無之次第と存ぜられ申候又之れに反し四里四方を得意場に飴菓子を商ふて日に漸く二十錢位ひしか稼ぎ得ざるの人が必ずしも愉快なる暮しのなし得らる事に無之候ならば妻は食事の后に夫の脊に依りて其勞を休め夫は今日見聞きたる事を妻に語り子供は兩親の間に足踏延して樂し氣に聞き居る事も無之歟と被存申候

斯くの如くして富貴の人必ずしも美しき「ホーム」を作り得るとも申されず貧賤の者必ず美しき「ホーム」を作り得ざるとも斷言成兼候半には氣樂なる住居幸福なる生活愉快なる暮し乃ち官吏ならば免職された日も商人ならば損失を釀した夜も職人ならば得意場を失つた時も農夫ならば思はざるの不作に係つた折も夫は妻に落膽失望不快の念を起さしめざる樣前途の面白みを話して我と自づから優しき聲をなし妻は夫に事の過去を告げて第二の勝利を闘せしむるため進んで元氣の顏をなすと子は親、親は子、子は兄弟姉妹相依て慰めつ慰められつ共に倶に唯眞實又眞實にして一家團欒し時は冱寒嚴冬軒に垂氷の連なるとも敷居內は鳥謳ひ花笑ふの春の如とくなる美しき「ホーム」は抑も何れの邊りに宿る可き事に候哉果して蜉蝣に似たる此生涯を樂しく送られ申す可き哉之れ万人が万人

日より日に移つてなす處ろの疑問とは存られ申候。左れど此疑問は決して解するに難きものとは實驗上云へぬ事と信ぜられ申居候何故と御尋ねもあらば人各其分を知れば夫れにて解けると御答へ申上べき事に候若し人が其分を承知致し候ならば妹は姉を尊ばぬ筈もなく弟は兄を尊まぬ譯もなく子は親、親よりは祖父母、祖父母より曾祖父母……葉は枝、枝は幹、幹は根と溯らんには此森羅万象有ると有ゆるものを造り玉ひし神は降ても照ても是非尊敬せねばならぬ次第に立至るは申すも愚かな事に有之候然るに此尤も尊敬すべき神をも猶尊敬せず守る可き道をも守らぬ人にして如何にして……

…よし直接には曾祖父母祖父母父母兄姉とも申せ造り玉ひし神より云へば唯夫れ其子孫なる此等の人々を尊敬戀愛致され候べき哉堪へて道理に有之間敷次第に御座候既にケ樣にして他に對して尊敬戀愛なければ之れに面じて尊敬戀愛の來たろう譯もなきは勿論に候へば美なる「ホーム」の從つて造れ樣所以は無之候左れば幸福なる生活氣樂なる住居愉快なる暮しは唯夫れ敬神の念厚き屋の棟乃ち富貴貧賤に係らず親は親、子は子、姉は姉、弟は弟と天に對して己れの分を守るの家に造らる丶明かに斷言申され可く候 私は世人が万能一心足らずして此解し易き問題を自から六ケ敷ものとして苦勞致され候は更々合點の參らぬ所ろに御坐候以上は私が何人に對ふも臆面なしに述べんとする「ホーム」を美になすに付ての發へを申述べ候ものにて再び申せば「ホーム」を美にするは敢て金溜る事でなく學問する事でなく先づ第一に敬神の念を厚つくせねばならぬと申したる四件に有之候然し乍ら自然心得違ひの件も候はば幸に御叱正相成度御試問を機會に只管奉希聖候敬具百拜。」

評に曰く、御尤のお説ではあり升が、御經驗上のお答としては承わりて何さなく感じ難き樣存じ升す、決して劣ると申すのではありませぬが、此譯で第三等さ定めました。

中點應問

相女生

甲の答

女學生初めて家を持たる時第一活計の經濟を知り次に世間の交際其外面倒あるを知り而して親の恩を知り有難しと思ひ升これは自身の經驗です。

乙の答

ホームを美しくするには心を溫和に持ちて身を愼しみ眞誠の情を露はすより外致方無之候。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評に云く、甚はだ簡短のお答ですが意味深長にして味うほど其益を感じ、褒るに離ちがたき心地がします無論中等の品にあたる御經驗上の確説と見とめます

尚ほ上等に當りたる答は次號に載せます。

○輿論必しも是ならず

ミ、子、

嘗て英國に一奇人あり名をリツトンと云へり或日一議會ありてリツトン氏も此に臨席せり其傍なる某曰く「此議事に就て天下の輿論は果して如何ならん」と、氏之に應へて曰く「何ぞ人に問ふを須ゐん天下の輿論是ならざるもの甚だ多し」と某亦曰く「然れど公衆の輿論は大抵真理に基くものに非ずや」と、リツトン氏曰く「君少しく考慮せよ嘗て大總督ロツドニーが戰場に於て大勝利を得し時天下の人々は皆彼を稱讃して措かざりしに非ずや然れど彼の爲せし所を問へば人を殺せしに外ならず是果して稱讃すべき事なるか、亦嘗てグルーヴと云へる人あり或市街に至り人々の間に詐僞權略欺誑陰謀の罪悪行はるゝを見て大に慷慨し市中に跪ひて上帝に祈れり人々彼を見て狂人ありと云へり此人果して狂人なるか人を殺す者を以て功績ありとなし上帝を奉ずる義人を以て狂人と云ふ天下の輿論概ね斯の如し尚輿論は信ずべしとなすか」と此言甚だ奇且妙ならずや。

○上州紀行（日記拔がき）下

霞峯子

十二日起出てまだきなく鉄砲を携へ野邊に獵せんとて行く野中に一つの新墓ありけり立寄りて見れば親しき友どちの妻にておはせし人の墓にぞありける去年の夏一週年の紀念會にものして「郭公うき世のがれて此夏はたのしき國に音をばなくらん」と詠み侍りける事ども思ひ出るも涙の種、またも詠み出でぬ

　うつせみのもぬけのからを殘し置て
　　いかなる空に君はすむらん

墓の上に一本の松植え付けたりまだ若木なれど生ひ立んすがたも見へていとゆかし

　生ひそめて千代もかはらぬ姫小松
　　君がみさほにくらべてや見ん

君は今如何に此世を見給ふらん殘し置きしみどり子のなつかしくやあらん抔思ひ出てゝ

　みどり子のなく聲きけばなき君は
　　死出の山路もふみまよふらん

涙を拭ひつゝそがみどり子の所に歸り來り見ればいよ〳〵あはれになつかしきあらぬ人を母と呼ぶもいぢらし

　たらちねのなき身と知らでよそ人を
　　親とよぶ子のかなしからずや

暫らく友どちと打語へる後此處を立ちて亦高崎に向ふ此間は廣き原にて近くには山もなし道の兩側に並み立てる杉の老木をふく風いと寒し

　ほの〳〵と白雲山は霞めども
　　淺間おろしの寒き今日哉

車の上より眺むるにひくき山々は雪も消えてうす紫に打霞む、そが上に秀でゝつもれる雪の上に高丈の黒烟を吐くは是ぞ淺間の山なる、其が側につゞきて白く見ゆるは即ちこしの山なるべし何れ昔を忍ぶ種ならぬはなし

　きえのこる昔のかげも見ゆるかな
　　あさまのけふりこしの白雪

　春淺み淺間の雪は消えねども
　　霞にこもるしらくもの山

高崎より我古郷へは道の程も遠からねば一度歸りまくほりすれど何時ぞや思ひ立つ事ありて故郷を出てたりければ

　思ふことかなはざりせばふたつ橋
　　ふたゝびかへりふまじとぞ思ふ

此は我故郷に近きあたりの野川に渡せる橋によそへて思ふ所をのべしなり久々にて故郷の野山を眺め感淺からぬまゝ此文をものしつ己が記憶となすのみ素より世の人に見すべくもあらず二月十三日。

○其積の手代氣質　　みれ子

世の人文學と云へば之を賤しめ之を輕んずる人はあれど其一部分なる小説と云へば甚だ賤しむべきもの輕んずべきものと思ふ人多かり是れ小説作者の罪か將た讀む人の過ちによりて斯く世の人をして思はしめたるものか。それわらはの知る處あらねどわが見る所は是と異り小説は如何程卑猥に見ゆるものも拙作と思はるゝものも讀む人の心一ッにて善を勸め惡を懲すの功能あるを覺ゆ左ればわらはは生れつき鈍き質性にて人なみ／＼に書物を讀み得ねど讀めば必らず何事をか學び得ると自ら信ず近頃少しの間暇をぬすみて其積の著はせる手代氣質てう小説を讀み心に感ぜし所を少し述ん其序に曰く

龍のよく雲に昇るは其鱗たて髮あるにより鶴のよく天に翔るは其羽翅あるによれり主人家業に賢くとも助くる手代がなくして獨り撃つ鼓は鳴ずねをよく出して商ひ物に利を得るは其家の手代の働き一ッに有り云々

此書はもと題して手代氣質と云ふ故其内には手代の事のみ記るすに止ると雖も之を推して考ふれば上は千軍萬馬を使用する王公將相より下は一人の婢僕を召し使ふ人々に至る迄皆其手下に用ひる人をよく使ふべきを知る其中頃に

常に我氣にあふ者は不忠の手代と思ふ可し

とあるが如きは誠に千古の確言とや申すべき苟も人の上に立つ者はよく此語を記憶すべきことにこそ此外御學び得たる所もあれど餘り長くあるをもて此に寄しつゝ世の人々が斯く心かけて讀まんには小説も世道人心に益あるものと感ずるまゝを記るすにあんかしこ

○貧乏の原因（前號續）

第七にあぐべき者は酒を飲み身を亡す輩の寡婦及び兒女なり此徒貧乏人の五分の一を占む斯る寡婦の夫たる者多くは仕事巧みなる職工なりとぞ（第八）此は品行正しくして汲々職業を勵むも不幸にして妻子に先だつが故にあとに殘る寡婦及び兒女之が爲めに貧苦に陷るの類なり貧乏人の六分の一は此種に屬す（第九）夫は品行正しく職業を怠らざりしも其子の酒を嗜むが爲め貧を致すの寡婦にして貧乏人の百分の一は此種類の占むる所ある可し（第十）婦人にして飲酒を爲さゞるも不品行ある爲めに貧を招くの類あり之に依て觀ればマンチエスター府内貧乏人中百分の五十一餘は飲酒に原因するものにして百分の四十八餘は他の原因に基くものと知るべし云々（なほあり）

きよめぬ庭

洒落齋主人

其四 幽靈の茶屋

「よしやわざくれ身は朝顔の、ひかげまつ間の花の色、恨みられしも恨みし人も、共に消ゆく野邊の露」とは加賀節の小唄になん。されば人の命のはかなき事さとりては、束の間も、そゞろにすですべきにはあらず。古き詩にも「人生寄一生、奄忽若飈塵」とは云ひけるなど、考ふるほどに、餘りに氣のむすぼれしまゝ、そを慰めばやと、たゞ獨り庵を出てゝ、見ればとぶほたるまだつけこさぬ雲井よりゆきてう秋とかぜやふくらん」。秋の野の景色、いとおもしろく、桔梗、萱、女郎花、うすきこき、こきまぜて、咲亂れたるさまの、優に美しき、松虫の音さえ。おり〳〵におとづれて、哀れを添ふるさま、いとゞ、人生の苦樂生涯を悟れかしとの情態見るにつけ、聞くにつけ、そゞろに足の進むを覺へず、ふとある野末になん到りける。

と見れば萩の垣、結び廻したる、古木もて造りたる門に、折戸の半開き、右手には、餘りに高からぬ柳の、先頃の野分に、葉の半ふるはれたるが、いと哀れ氣に垂れたり、左手の門の柱に、塔婆の形したる札に、細々と「幽靈の茶や」となん書たりけり。己の好事なる、ことには先のほどより、心の中、切りに哀れを催し、泡沫夢幻の涙、たゞよふ頃なりければ、此の茶や訪ひこゝろみ、幸ひ渇のきて、飲物の欲しきまゝ、茶一つ乞ひてんと、折戸を入れば、入口とおぼしき所あり。

酒 コレ誰か居るか茶一服乞ひたし

と訪問たるに、「へー」と云ふ聲と共に、閾に跼く少女ありけり。年の頃は十餘り七八にもありなん、いと清氣に粧たれど、髮の毛は洗ひたるまゝなるにや、ふり亂したるが、頸より顔の邊まで、かゝりたる間より、出したる面をみれば、病みたる後にや、又は打つゞきたる、心の痛にてもありしや、其色の青き事、秋まだあさき門の壺廬にも譬へなん許り、此方をむきて、少し笑みたる氣色、餘りに物凄く身慄たり。

酒 此所は一躰何と云所ですナぜ此方は幽靈の茶やと云のダエ

女 へー此所は仇し野の末で御座ゐまして、幽靈の茶やと申ます譯は、さし上ます御茶より、立のぼる湯氣の中に、アリ〳〵と幽靈の形が、顯はれますので、之を其儘に、屋號に致しましたのです、先づ〳〵座席へ御通り被下、只今御茶を差上まするで御座ります。

と云ふが儘、案内に連て、座席に到り見れば、六疊許りにやありなん、最淸く〱しつらへたるさまにて、南の方は椽を隔てゝ、庭の方にむき、東の方に床あり、間にかけたる軸は、なにやらんと見るに、はや日暮近くなりしまゝ、よくは讀み得ねど

　としすけの中將入道の身まかりしに追善の結緣經の
　うた隨喜功德品の世皆不牢固如水沫泡炎

うきながらしばしたゞよふ水の淡の
　消なてすさむ世とはたのまず　兼好

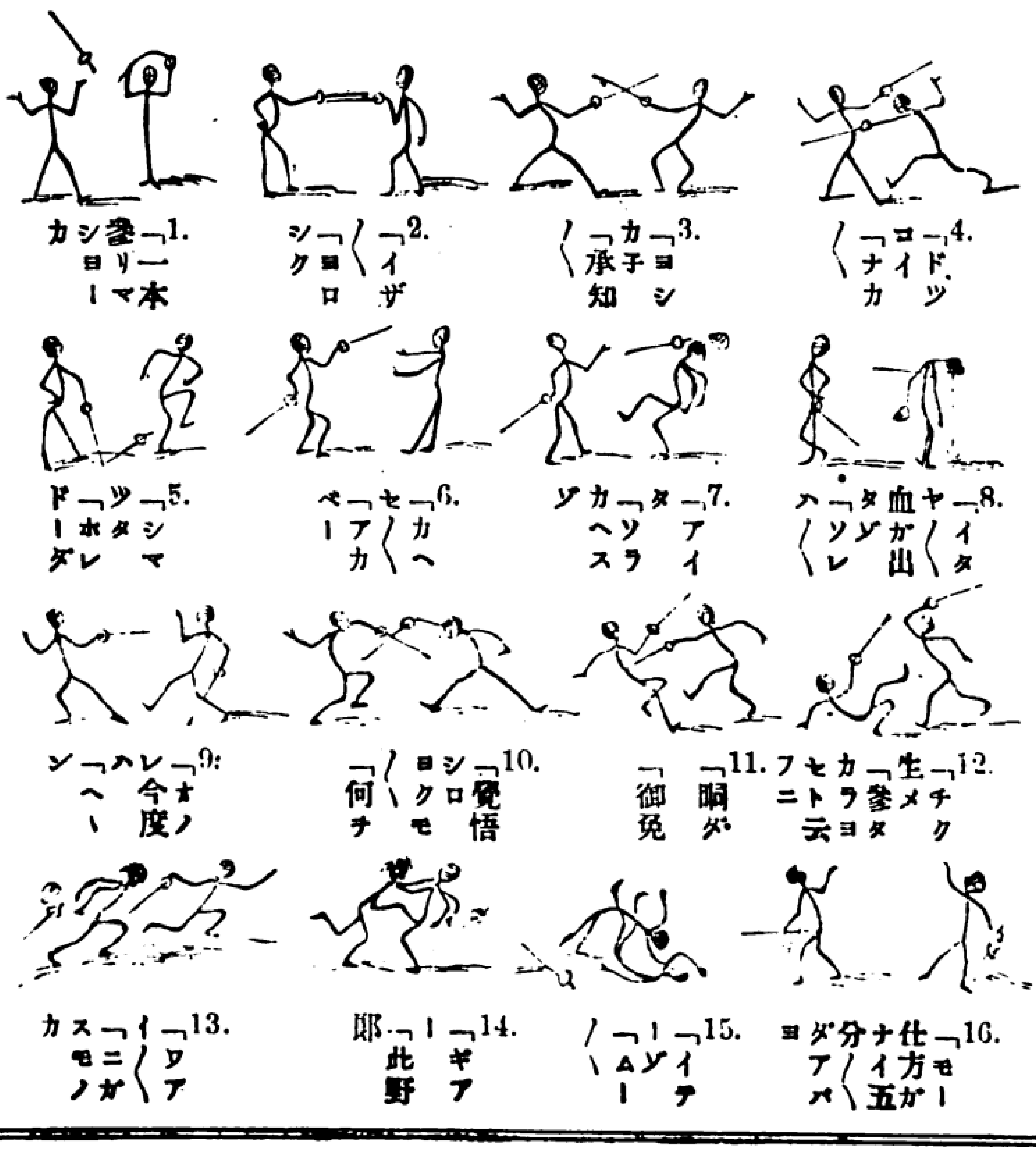
とかすかに讀まれたり、實にかゝる家には、相應しきものになん、ありけれと思ふうち、間の襖おしひらきて、黑檀の茶盆に、古染着の急須同じ湯冷し、茶碗どもとり添へ、左手にさゝげ、右手に銀瓶にもやわらん、もち出たり。己が端近く居坐りて、くさ〲の物を据へ、先づ湯を冷しつゝ、急須にさしたるが、方の如くして、茶碗にうつしつゝ、己が前に出して

　女　どうぞ湯氣を御覽あそばして被下

と云ふがまゝに、切りに湯氣の中、詠むれど、幽靈のさましたる者さらに、見ゆる事なく、とかくするうちには、湯氣もたゝずなりぬ。「こはいぶかし」と少女もいらちて、數度湯をかへ、さし試むれど、幽靈の影だにもなし。己もいと本意なき事に思ひ、時の過るをも、渴のさかりにありもて行くをも、うちわすれつゝ、ながめ居たれど、幽靈の見えざれば、少しく氣をいらちて、

　酒　ドウモ先きから一時間も待つて居るが、幽靈の小兒ほどの者も見へないちやないか、

　女　ドウ致しましたのでしやう、此んな事はないのですが、それとも、こう幽靈の出ぬのを見ますと、此れハチト法事(炮じ)が過ぎましたかしら。



小説

○浮世の波間（七）

破月子

白波靜かに寄する處、靑苔奇岸を粧ふの邊り、唯見る前途二十間餘小丘の上に一個の人影あり碧天蒼海の景を賞するの人か、然らずんば釣竿を携へて魚鱗を漁するの人なるべし、磯馴松に宿りあへぬ群鳥の樣、大空に消へて行くある藻掬の烟り、濱の景色の面白きまゝに我れをも知らず彼の人影に近付て何心なく打見やれば此處らあたりよ見もせざる實よこれ窈窕たる一小女、神容淑然として高操面に表はれ、しかも嚴乎として犯すべからざるの風采を備ふ、服裝の淡淸なる動止の優然たるは一層に其品格の高きを思はしむ年の頃は十七八の歲齡を加へたるべく遙かに茫乎たる蒼海を望で獨り思ふ所あるが如し、彼れ余の近付きしを知るや知らずや唯一心に淸音を弄して樂しみ居れり彼歌て云ふ。

浮世の波路いとあらくとも　望のつなにすがり行かば
などか沈まん身はもろ」とも
我れいと安くこの波路行かん　愛の板子に身をまかせなば
とこしへの國に住む日ぞあらん

この二句は分明に聞き得たり蓋し心に浮ぶ感慨を其儘に口づさむなるべし歌曲の妙銀線を彈じ玉金を擧するが如し小女は歌ひ終て何事をか獨語せり、余と小女の距離僅かに三四間微風に隨て彼れが言語余が耳底に落つ

東京から來て見ると見付ない海山の景色は本當に美しひこと、花里さんなどに此の景色を見せたら何とおつしやるだらう、學校の皆さんにも見せて上度い――ソウ〳〵小山さんのような不幸な方をこのような處へ御連れ申したらどんなに御よろこびダロー、私あんどは幸にあの方のようなことがないからこれからも自分の決心次第デドーニデモなるが――惰弱い女の身でもキット出來ないことはない、ソォー途中でチェンジ（變ずる）することが――するようデハ。世の人が何と曰ても（此處余聞取るを得ず）モー大丈夫デス、キット安心ダ只理想によりて……

自問自答其躰度屹然として何事をか決するものゝ如し、余心に思へらく彼れ意中何事をか計畫し何事をか望み何事をか決するものぞ、年少の身浮世の波瀾を知らず、岸頭に立て漠たる蒼海席の如きを見て未來の靜逸を豫想し、既往現在に比して來る可き日の平安なるを信ずるものゝ如し、彼れ或は世事の難を知ん然ども恐くは未だ世人が經過し遭遇したる艱難を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

知らざるなり己れが理想によりて一朝惺風慘憺として人々相嚙むの戰塲を見たらんには彼れ恐らくは失望落膽すべし彼れ必ず苦吟煩悶すべし或は彼れが肉躰は冷々たる土中に葬らるべし嗚呼余は浮世の波間にたゞよう人の如何なるかを說かざる可らず此の可憐の乙女に對し、此の年少の佳人に向て、此に於ては余は己れが胸裡の希望を告げ彼れが過ちを正さんものと決心し一歩を進めたりしも再び思ふ余はこれ朴訥の野人恐らくは彼れが淸遊を妨ぐべし况んや人の秘事を盜聽し一面の識なき人に對し然り此の佳人に對し說を陳ぶる蓋し信あるもこれ禮なきなりと、卒然身を飜して小丘を下り旅寓に歸る。余の寓に歸るや日全く沒し皎々たる氷輪既に高し波響、松濤の外旅窓を音づるゝものなく寂然塵世を離るゝの思あり氣靜かに心安き時忽ち思ひ出す彼の小女が事、何人の愛孃か余にしてもし眞の信愛あらしめば敢て一言の注意を遺すべきに今は百度の悔をなすとも及ばず今よりかの小丘に趣かんか時既に遲きを如何せん、唯だ六魂飛て大磯の海濱を漂泊せり。

おすゝめに隨ひ今月の通信女學から講師の肖像を載せます。

寄書

懸賞和歌募集廣告

春陽來復花笑ひ鳥歌ふの佳節となりぬ或は東風輕袖を拂ふの日覩々として水上に亂るゝ花を眺め或は微温肌に快きの夜朦朧として中宮に霞むの春月を望まば誰れか多少の感なからんや夫れ和歌は感情を發表するの器なり我社會題を揭けて廣く和歌を全國婦女子より募り一は以て歌道の隆盛を計り一は以て女子の此道に一層熱心するに至らん事を望む江湖の婦女子諸君願くは續々秀詠を投寄せられん事を

歌題　水邊落花　春月朧々

〇本月卅一日〆切〇第一等賞上製百人一首講義〇第二等賞美製百人一首講義〇第三等賞女學雜誌一ヶ月〇一題につき一人一首に限る、〇撰者池袋淸風大人　女學雜誌社

〇婦人と文學の未來

老川居士

我邦人は兎角物事に飽き易き性あり之と謂ふも其物事に就くと餘りに輕卒にて殆んど自然の必要より迫まられて來りし者に非るが故なるべしされば彼文學の如きも昨年已來非常の流行にて一時法學醫學と狂奔したりし書生なども一轉して此方の奴隸となし天下耳と目と口とは悉く此文學に向て集れる樣の盛況なりしが思へば之も唯一時の流行にて作者にても多くは唯面白半分にて之に從ひし程のと故(他にも隨分妙な理由なきには非ざれど)世の人より文學者の責任は此の如くなり今日の小說はさあるべからずと色々に諫告され忠言されても實際本人は一向其等に頓着なく却て我々に對してかゝる注文とは少しく買ひ過ぎせられしに非ずやなどと冷笑し去りし人も或は多かりしなるべしかゝる有樣なりし故文學の流行は決して長く續くべきに非ず今日の所、表面上は尙相變らず其餘勢を保ち居るが如くには見ゆれども大躰作者の心事已に此の如く從つて社會の氣向も已に漸く文學に飽き來りしが如き摸樣あるを見れば本年の末頃には或は宛も昨年の法學の如き盛者必衰觀を示すには非るやと怪まるゝなり扨此際こそ瀾よ文學界一大陶汰の時節にて是まで平々凡々暗を利し陰に食へる小文學者は漸く續々と此世界を退くべく千紅万緣一たび淸掃し去れる後は亭々たる松柏節を守りて殘る所の文人詩人及び今迄文學界の隱居連若くは之より後徐ろに出で來らん人々の中よりぞ或は初て眞の大詩宗大文豪も顯はるゝあるべしと思はる是吾人が當らずと雖も遠からざるべき豫言なりしかしかゝる男子は素より甚だ數も多からざるべく兎角臨機應變唯流行を追ひ勢を見て就く今の世の中に於ては眞に賴むべき者唯天然の文學者(文學は男子の天職に非ず)婦人の世界あるのみならんか吾人は深く此後來るべき眞の文學流行の時には婦人の光明の燦爛と輝きあらんとを希ふて止まざるなり。

○ベルッ先生の存娼論

西原順

近頃廢娼論の盛に成り行くと共に是れが反對の議論も色々と出で來る事にて中には隨分目ざましき反對論も可有之事と待居候へ共出るのも〳〵千篇一律少しも感伏不致候て打過候處去る土曜日の大日本私立衞生會にてベルッ先生の演舌否原稿の大意なりと云ふを新聞紙上に拜讀せしが其中に四ヶ條(條目略)程擧げてありましたが是れも實際行はるゝ事とは覺へず是等の說に付ては世間同感の御方殊に貴社の御方々には定めて御卓見も可有之私共が淺はかな事を不申上とも必ず御高論御示しある事と存候へば別には不申上唯だ右の條目外に浮り候說は未だ始めての事と存候へば聊か思付し事柄を申上候。

(第一)に彼れ基督教徒は廢娼論を唱ふれ共聖典中此事あるを見ず云々

嗚呼先生は學問の淵數とも云はるゝ獨逸國の御人にてありながら淺はかなる說を吐かるゝ者かな凡て基督教に限らず教なる者は其精神を教て形を教ゆる者にてはなく例へば惡をなすべからずと云ふ時は凡て我心に惡と感じ本心に耻るが如き事は何にてもなすべからざるを云にて彼の事を爲せ此事を爲すべからずと云ふが如き世間事物の繁雜なる一々彼此と小學兒童に運筆を教ゆるが如きは限りなかるべし文明國に於て奴隷廢止の行はれしは主として基督教の感化なるを誰しも知れる所なるも其の聖典中何れに奴隷廢止の事を教へたるか少しく御心を注がれたし況んや聖典中姦淫の不潔不德ゆるすべからざるを教るに於てをや例へば天下の大醫方即ち先生杯が數多の患者を治療せらるゝに當りても一々是れは藥物には見へない否々かう書いてあると云ふて診斷せらるゝならば恐らく病人に接する事は六ヶしく存じられ候若し反對に先生の口調をかりて申さば如何に高妙なる病理書を繙くも存娼論を唱ふべしとはよも教へてあるまじき事と存候。

(第二)又若し廢娼の行はるゝ者ならば基督教の盛なる歐州諸國には今日既に其跡を絕つ筈なり云々

是れも隨分極端の論理にして如何に歐州諸國が基督教國と云ふにせよ是れは他國に比して云ふ語にて決して完全無欠の宗教國とは云へ難し元より宗教は世界始まつてより遂に出來し者にてはなく世界人間が罪惡に沈んだる極點に於て起りし者なれば如何に盛なりとは云へ一人も不殘信者とは見做されず追々と信者の數の增す事は是迄の比例にて明かなれば將來も亦た漸々と數を增し黃金世界に向て進みつゝあるは今日の有樣なれどもなか〳〵三年や五年の間に斯く成る者にてはなし然らば今日に於て不潔なる事柄の多きは怪むに足らず去りながら日に月に道德の進み行く事は過去の歷史に照して明なれば何時しか黃金世界に達し眞理の勝を制するは私共の信じて疑はざる所なり何卒かゝる一部分を見て淺はかなる事を考へらるゝは御無用と存候。

右は極めて粗末なる考なれば世人の疑を解くと云ふ程にも無之候へ共思ひ付きし儘を申上貴社新紙の餘白を汚し候へば幾重にも御許しを乞ふ。

尙ほ序に申上度は或る新聞紙には存娼論万歲とでも云ふべき奇妙なる畫を挿み其內に(或る論者の落し物)抔とおかしく記しあり候へ共是れ等は私共の意とするに足らぬ者にて廢娼論を唱ふる人必ずしも道德家にもあらざるべく世の中には御幣かつぎもあらわるゝ者なれば是等は眞實の友とするに足られば決してたのむまじき事にて隨分衞生會や其他の場所にて堂々と立派に酒の害杯を說きながら歸り路にて大杯を傾むけては細君を困むる御方もなしとは云はず私共の友とすべきは清淨無垢の眞心もて罪惡をにくみ不潔を忌む如き兄弟姉妹の結合力にある者なれば何卒貴社の御方々有志のあらん限りかき集め熱心奮發して遠からず愛する同胞の喜び笑ひつゝ眞理の大道を步まん時の來らん事を祈り侍る。

○肥田野八重子の履歷

田部武治

八重子は豐橋警察署長肥田野五郎氏の妻なり明治四年四月三日を以て東京淺草區鳥越町に生る元肥前唐津藩士大野右仲氏の長女なり幼にして父に從て四方に從り年甫て五歲小學校の教を受く明治十五年千葉に在りて同縣女子師範學校に入學す年十有二爾來螢雪の勤を積むと二年時に嚴君適々職を奉じて長野縣に在り歸て父母を省す此行恰も伉儷の約を促し遂に肥田野五郎氏に適く實に明治十七年十月二十六日なり。

八重子嫁して舅姑なし妙齡能く家事に執掌す其賓客に接する禮あり鄉黨に交はる信あり特に僕婢を遇する溫柔にして道あり性又婉娩淑順所天に仕へて能く婦道を盡す十八年四月中肥田野氏命を奉じて東京に遊學す淹留一年其間八重子家を治むる整肅能く良人をして內顧の患なからしむ。

同十九年十月肥田野氏任に群馬縣に赴き高崎に寓す八重子始て基督教を信じ西群馬教會に於て洗禮を受く爾來信仰日に篤を加ふ同廿二年二月名古屋に從る乃ち一致教會に於て專ら宗教上の運動に與り拮据 盡力す又米人マッカルピン夫人に從て

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

音樂を學ぶ七月再び豐橋に轉す蓋し墨突未だ黔まずして萍踪東西に流寓するは決して八重子の志にあらざるべきも未だ嘗て之を聲色に出さず其柔順槩れ此の如し其豐橋に在る當地婦人の德望地位兩ながら甚だ低きを歎き同志を糾合して婦人會を組織し大に爲す所あらんとを期せり是より先き四月八重子懸ずる所あり奮然さして良人の許を得上京して贊か明治女學校に執りしも未だ幾ならずして病に罹り業半にして還る八月上旬病再び發し翌年一月に至りて病勢愈々篤く親戚故舊枕を擁す八重子自ら起ざるを知るさ雖ども從容として苦痛の色なし日に聖書を讀み讃美歌を誦し遙に永遠不朽の樂土を望み胸中復一點の塵埃なし將に眠らんさす平生好む所の「樂しき國は天にあり」の讃美を歌んさして既に歌ふ能はず肥田野氏續て之を閲れば八重子怡然さして首肯す顏色玲瓏光輝人を射るものあるが如し實に明治廿三年一月廿七日午前三時なり享年纔に二十歲翌日美以教會牧師山田俊八氏肥田野氏の宅に就て式を擧げ說教及信徒一同の讃美歌あり八重子始終信仰に富み教會に出席し知人を誘導す其病に臥するより以來特に神の榮光を顯はし無聲無臭の間大に人を感動せしめたり就中嚴君大野氏深く八重子の信仰に感發し始て八重子の基督教を信奉するとを許せしのみならず其弟をして更に之を信ぜしむ會葬するもの雲霞の如し識るさ識らざるさ皆八重子の信仰を聽き或は基督教の何物たるを辨ぜしもの少からず八重子既に信仰の善き戰を戰ひ又能く無言の間に基督の道を傳ふ而して今や此世に亡し哀哉。

○祖君の敎へ、秤の譬へ

山梨　尙白生

今を距る十三年前生が十三の歲なりき近隣に爭ひ起り生が祖君に判定を乞へり祖君時に七十七歲なれども尙壯年の如くなりき其事終るの後ち生を召して申されける樣、

啓や　祖父(ぢい)はな學問もせず文字も知らぬが道理に二ッは無い人間は一ッの定まつた見識が無くてはならぬ譬へて見れば秤の樣なもので法馬が見識ジヤ物が事故ジヤ法馬で物を計つて星で見る星は分別ジヤ物は輕くても重くても一ッの法馬で計られる事は大きくても小くても一ッの見識で極められる人の上へ立つには第一此見識がかんじんジヤ、ナゼさ云ふにドッチへも傾かぬ樣にせれば偏頗にある偏頗になれば人が承知せぬ又下々の中に爭か起ッた時も此見識さ云ふ法馬で善し惡しを判斷せればならぬジヤ今日の事なども分りキッテ居るが慾に迷さわれるからイケヌ慾が一番の邪魔物ジヤ一身の事でも一家の事でも同じ事ジヤ……云々

生は其の時面白き事とも思はざりしが近頃世の事など見るにツケ聞くにツケ祖君の言葉の味ひ限りなきを知りたり祖君今年八十九尙健康に在せり。

○竹の一ふし

塵外居士

目出度千年(めでたきちとせ)の齡(よはひ)を重(かさ)ぬるもさ其一(そのひと)ふしより根(ね)ざせり、人(ひと)さして竹(たけ)のうるはしくなよやかなるこゝろもて世(よ)に立(た)たばなどかうきことさやある。

直(なほ)くして一(ひと)ふしあれば吳竹(くれたけ)の
　うきふししげき世(よ)にはすむさも

○歌四首

駿臺　黑澤茂子

霞隔月

影たにも霞もりてよ春の月
　そでにさめなん程ならすさも

春月

櫻さく春はかつらの花さへそ
　くもになりゆく山のはの月

春鶴

子を思ふ夜るの哀をわすらへん
　初日によばふ鶴のもろ聲

鶯和溪聲

鶯も羽ふきに雪やふらすらん
　岑かきならす氷に來鳴て

第二回懸賞文の問

題。女學生出校して后ち學びたりし學科の何れか尤も實効を奏せしや、附たり出世后學窓を顧みて教科上に於ける感覺何如ん。

右答文〆切四月五日限り、一等賞女學雜誌廿冊切手。二等同十冊切手。三等同五冊切手。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

開書

○天下同胞に訴ふ

下毛　H. H.　生

二月二十四日午后六時生が晩食を喫するの時女學雜誌第二百一號到來せり箸を片手にして先づ之を讀む卷末に至て一警報に接せり箸を投じ走て隣家に至り一女子を捕へイ問ふ貴孃も亦桑港に行かんとする乎と彼女失笑す是に於て生本性に復し亦爲す處を知らず消然家に歸て再び女學雜誌を讀む愈讀めは愈悲し生嘗て此雜誌を指さし嘆て曰く吾國此好雜誌ありて婦女子を戒む今より以後復敗德の女子あるとなしと何ぞ圖らん今日此悲報に接せんとは嗚呼敗德の女子一たひ米國に渡て吾神州を慚死せしめんとす之を讀み之を聞く者誰か憤怒せざらんや今や吾國民は是等敗德の女子を責め且つ神州以外に放逐し以て吾國の恥辱を雪ざる可らず豈に啻に今後渡米の敗德者を追𢌞す已耳を以て滿足す可けんや宜しく檄を天下に飛して直よ之を爲す可きなり敢て請ふ最大の活字を用て號外を發し普く同胞に知らしめ給はんことを。

交詢

●寫蜀生　波の屋君が切角眞の名醫を御指名下されたれど其名醫の方々が何處にお住ひなるや頓と分らず吾等如き田舍ものには甚はだ殘念ゆへ此上の御親切には宿所なりも御知らせの程願上升す、（編者曰く、府下名醫の桀は本誌第二百號にあり、右問に對し波の屋君の答は左の如し）。

右答　東京府下名醫の桀宿所付

波の舍　瀧舟記

內　科

○本郷元富士町帝國大學教師館　ドクトル、ベルツ氏
○神田區駿河臺北甲賀町十一番地　佐々木東洋氏
○同區同町同番地　醫學博士佐々木政吉氏
○同區小川町警察署裏　樫村淸德氏
○京橋區新橋南金六町　醫學士　森永友健氏
○同區木挽町二丁目十三番地　實吉安純氏
○小石川區武島町三十一番地　醫學士　青山胤通氏

外　科

○本郷區元富士町帝國大學教師館　ドクトル、スクリバ氏
○同區湯島御茶の水　醫學博士佐藤進氏
○麴町區平河町六丁目九番地　醫學博士橋本綱常氏
○京橋區西紺屋町十番地　醫學博士高木兼寛氏
○神田區猿樂町廿五番地　醫學士　佐藤三吉氏

產科婦人科

○本郷區駒込東片町百五十二番地　醫學士　濱田玄達氏

眼　科

○神田區錦町三丁目一番地　醫學士　甲野棐氏
○芝區愛宕町二丁目五番地　醫學士　河本重次郎氏
○本郷區春日町　醫學士　須田哲造氏
○神田區駿河臺督教（ニコライ）會堂前　井上達也氏

小兒科

○麴町區飯田町四丁目十八番地　醫學士　弘田長氏

皮膚病科

近日歸朝之筈　醫學士　村田謙太郎氏

精神病科

○本郷區駒込西片町十番地　醫學士　榊俶氏

病　院

○本郷區元富士町帝國大學內　醫科大學第一醫院
○神田區泉町元藤堂邸　醫科大學第二醫院
○芝區芝公園前　東京慈惠醫院
○麴町區飯田町五丁目　赤十字社病院

右之內にて內科のベルツ氏、佐々木政吉氏、青山胤通氏、外科スクリバ氏、佐藤三吉氏、產科婦人科濱田玄達氏、眼科甲野棐氏、河本重次郎氏、小兒科弘田長氏諸氏は醫科大學の教授（甲野氏は助教授）なれば第一醫院又は第二醫院の內にて此等の名醫諸氏の診察を受れば診察料を拂ふに及ばずさあん眞に貲力乏しき人々の爲にはこよなき幸ならんかし。

●香遊生　夫には植村正久氏の眞理一斑か小崎弘道氏の政教新論同じく信仰の理由などが宜しひでしやう、又日本橋區內では兩替町十二番地、矢の倉一番地、元大工町九番町の三ヶ所に教會が在ります、每日曜午后二時及び七時比に話しが在りましやう。

●きん女　獨逸の生活狀人情態家政の概れを知るには大畧はセルマンホームで知れます、たしか一圓七十錢で丸善にあります、お取次もします。

●山梨の方　ミス、アッケルマンは婚姻した人かとのお問、総べてミスとあるのは未だ婚姻せぬ人の事で夫故へ嬢と譯すのです。

時事

女學生の風聞と、

日本、讀賣の二新聞

吾人は前號の時事欄内に於て「女學生の風聞」と題する時報四篇を掲げ、讀賣記者に對して敢て一問を寄せたり、然るに讀賣記者は之を輕々しきとせず、去日曜日の紙上に於て全一日の社説欄を割愛し、鄭寧に吾人が迷ひとする所ろを解開せらる、好意啻ならず只管らに謝する所ろあり、扨て「男子不道德あるが故に女子の不道德を不問に附すべしと云ふ議論は何人と雖ども首肯せざるべし」の一事及び記者が吾人を責めて「無禮」なり「妄甚し」「宗教家たる記者衷心疚しき所ろ無き乎」等と叱責せられたるの一事に付きては、或は辨じたきとあり亦謝すべき所ろ少しとせず、但し其辨ずべきものは今特更に玆に辨ぜざるべし謝すべき者に至りては謹て之を謝せざるべからず、吾人文辭に嫺わず若し禮を失する所ろ有とせば希わくは恕せよ。末段に至り記者は辨じて云く、

・左り乍ら記者若し事の詳細を知りたくば幸に我社に來れ校名人名年齢事實一々記者に示すべし、と。

故に吾人は翌月曜日午后日就社を訪ふて、所云る校名及人名を一々質問したり、然るに主筆高田早苗君地方演説會に臨みて不在ある由に付、中井喜太郎氏に面會したり、氏は云く此事實を探報したるものは社員に非ずして社に關係あるもの也但し其名は言ひがたし、校名及人名は其掛りの者出社したるのち主筆と協議の上お答へすべし但し女學雜誌上に公載せらるゝときは兼ての本志に違ふが故に甚はだ迷惑ありと、吾人は云く承はりたる后ち之を掲載不致とお約束するとは出來ず但し一應は夫々の女學校に問合せ若し事實あらば之に忠告し誤報ならば之が爲に辨ずべし何れにせよ公益の爲めに致すべきに付必らずしも御社の素志に違ふとなかるべし、故に之を女學雜誌に掲載すると然らざるとに關せず、讀賣新聞社説の末段に明記ありしものに據り其校名、人名、及事實を承われば足れりと、然るに中井氏は前述せる事情あるに由り直ちにお答へしがたしとあるに付高田君歸京の日書状にて惠答を辱ふすと約して歸社せり、而して(月曜日)本誌編輯を了する迄には未だ其答書を得ず。然るに同日、

奇怪ある投書あり

慨歎居士と號して左の文章を投じぬ、但し居士の實名及宿所

は別に明白に記載しある也、

日本及讀賣二新聞女學生疾病に關する記事に就て

慨嘆居士

十數日前日本新聞は左の如き雜報を揭げたり

嘆ずべし筆を取るに躊躇したれど某ドクトルの確なる話なりさの事に安心して書くも忌はしきは此頃何が故にや女生徒の身の上に一種の病に罹るもの少からず其病毒の流布せる範圍は中々廣しさ云ふ(後畧)且つ右に付き一詩を添へたり

次に讀賣新聞は去月十八日の紙上にしかも其冒頭に於て女學生の品行てふ論題を揭げ前新聞の報ずる處を轉載し痛く女學生を罵れり彼等新聞は大に嘆息せり之を見たる余は大に慨嘆したり嘆息の餘り余は幾多の探究をなし終に余をして前記事を虛さするに足るの確報を得るに至らしめたり。

惡評は忽にして千里を走る殊に堂々たる二新聞の報ずる所は數万の讀者の視神經に觸れ腦髓に達し腦を驅り又直に其口唇より各朋友親族の鼓膜に傳へ加速的擴張を以て甚しく尾に尾を附たるの浮說さなり爲に數多の志士に暗淚を催さしめたり殊に故鄕に在る女學生の父兄は如何に心[illegible]痛めしならん慈母の溫和なる双頰は如何に多くの熱淚の跡を留めたりしならん彼等の中には心配の餘り

終に清淨潔白なる淑女に向ひて速に歸鄕せよ

さの命を下したるも或は之れ有らん實に去年唯一時風さ吹去りし醜聞の際にも現に屢々見聞したる處に非ずやかゝる風說は殊に堂々たる新紙上に在ては輕々に書立つ可きものに非ず注意の上にも注意を加へ充分確認したる後ならでは揭ぐ可らざるなり之が爲に無瑕なる淸き淑女も破德の名を受け有爲の子女をして不本意にも中途、學を止めしむるの不幸を招き女子教育上障害を及ぼす蓋少々ならざればなり既に彼の二新聞は斯かる虛報を以て世人を驚かし或は嘆かしめ或は泣かしめたり其罪豈輕からんや余は斷言す彼の記事は實に眞を誤るものなるを今其然る所以を述べん。

余は最も確認するに足る報知を得たり

即彼の記者の所謂ドクトル――さも有名なる醫師の如く書立たる某ドクトルは全くの僞ドクトル(或は十數年後のドルトル?)にして實は或私立醫學校の一書生なることを(記者は之を見て一驚を喫するならん)蓋し日本記者は一日某處に於て此書生に邂逅したりしなり記者は恐く彼を目しドクトルさ認たるなるべし時節柄存娼論矢釜敷折故此書生即記者の所謂ドクトルに向て直に娼妓存廢に就き醫學社會の輿論及自己の所見を問へり書生は得意さして廢娼の不可なるを答へしも素さ確たる意見あるに非ざれば其理由を辨ずるに苦しみ

自己の搆造に成る

根據なき女生徒疾病云々を喋々したりしなりそを記者は直に業々數も書立たりしなり讀賣新聞亦之を根據となし種々の說をなし爾來連日女學生醜聞てふ見出の下に曖昧なる想像搆造說らしき者を揭け大評判をなすに至れり實に慨嘆に堪へざるなり余は余が以上述べし處の眞に事實なるを保證す彼の記事の虛なりしを斷言す然れども余は當時の女學生皆有德の淑女なるやを知らず或は一二の不幸にもかゝる病に罹りしものあるやも知る可らず况して斯の如き病は自ら作爲せざるも父母より遺傳したる先天性(コンヂエニタル)なるものあればなり。

兎にも角にも彼の記事の虛なるとは

余が保證して一點の疑なきものなり余は敢て斯の如き辨護をなし女學生の好意を買ふが如き人種に非ず又徒に說を搆造して喜ぶものに非ず又女學生に或る直接の關係を有するものにも非ず只純乎たる醫學生なるも其虛報なるを知て終に筆を取るの已むを得ざるに至りしなり。

此報にして若し眞なりとせば驚ろくべきことと云ふべし、而して若し詐わつて言ふものならしめば堂々たる大新聞に對し禮を失すること少しとせず、故に吾人は、此投書を提げて

「日本」新聞社

に至り、彼のドクトル某氏なるものゝ實は何人なるやを質問したり、何んとなれば其實名を聞き得ると同時に此の投書の妄なることを確認し得べがき爲め也、然るに「日本」新聞の社員は、此實名を答へがたしと爲し若し之を明らかにする時は其ドクトルに向つて迷惑を懸ることありと云へり、吾人は左程ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、迄に蔓延したる惡病を診察したるドクトルが何の故に其名を明らかにすることを迷惑にするやを悟りがたしと云へども、抑

そも吾人は衷心に於て如此き報道の誤聞に歸して「日本」記者と共に快賀揚言して事實の誤まりなりしとを傳へ得なんとを希ふものあるが故に、則はち有の儘に此投書を掲ぐることとしたり。然れども「日本」の記者にして若し其ドクトルの名を明らかにするか若くはドクトル自から其名を明らかにして抑そも此惡病の何如ほど迄に蔓延し居るかを明證し得ば、此投書家の言は乍まち虚に屬すべく吾人も亦た猶預なく正誤すべし。

○アッケルマン孃

婦人矯風會及婦人白標倶樂部の會員は連合して去一日午后木挽町厚生館に演說會を催ふし、アッケルマン孃の爲め入場劵を賣り其餘金を同孃路費の中に寄附したり、演題はアラスカに於ける夜半の太陽と云ひ孃が得意とする所ろの演說ありしも、通辨によりて句々制止せらるゝが爲めか思の外に不出來ありし、扨て今週間は横濱にて日々演說し次週は左の日割にて府下の各所に演說あるべし、

三月十日　午后三時聖書講義（新榮町新榮會堂）、四時祈禱會（同上）。
同十一日　午后三時演說（九段明治女學校）夜七時同上（スキヤ橋會堂）。
同十二日　午前會員寫影、午后三時演說（大學講義室）。
同十三日　午后三時演說（麻布東洋英和女學校）、同七時同上（芝教會）。
同十四日　午后二時（牛込教會）夜七時（築地十三番女學校）。
同十五日　午后二時（青山ガルチホール）、七時（青山女學校）。
同十六日　午后二時（鳥居坂教會）、七時（鳥居坂女學校）。
同十七日　午后二時（番町教會）、七時（櫻井女學校）。
同十八日　午后二時（淺草教會）、七時（本郷教會）。
同十九日　午后三時（駿台英和女學校）、七時（本郷浸禮教會）。

何人にても自由に傍聽せらるゝことを得る也。

○一陽來復

新聞

は國民新聞、江湖新聞、双び出でゝより頓に生面を開き、何處も競爭に忙はしきが如し、讀むものは漸やく心地よくなるを喜こぶ。

批評

は正に人物批評に移れり、朝野新聞は遠慮なく酷評し、國民新聞は面白く評述し、改進新聞は小說家らしく風采を叙評せんとす。

小說

は不向となり下火辛ふじて生殘る、左りとて慷慨文も復た引立たず、人心浮は氣に倦を生じて固き者を好む。

雜誌

も之に連れて嚴格なるものが行はる、近頃新に起る雜誌を見よ、云く日本評論、云く福音週報、云くユニテリアン。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廢娼記事

厚生館演說 今日午后六時開場七時開會にて木挽町厚生館に島田三郎氏及び巖本の廢娼大演說あるべし。

神奈川より建議 去月廿四日神奈川縣西多摩郡百拾三名之總代として田中陸之助原島仙助安齋源一郎之三氏廢娼建白書を（知事不在に付）書記官のもとまで捧呈したり右建白書に賛成調印したる者の中にては當時縣會議員なる下田伊左衛門深澤權八中西仲太郎有志家にては瀨戶岡爲一郎馬場勘左衛門末た妙齡なる婦人にて萩原たけ高原うめ女史等進て賛成調印せられたり。

遙かに金を送る 曩に名古屋の有志婦人より廢娼建議を縣會へ呈出したるを聞き傳へ信州上伊那郡西春近村小出耗地寂照庵々主梅田道海尼は遙に之を賛成し拙尼も若し御地にあらば共に盡力申すべけれども何分山間僻遠の地に住し居候ては思ふにまかせず遺憾限りなし何卒御地の姉妹方は屈せず撓まず飽まで御盡力成しくだされたしとの意にて懇切なる書翰に金若干を添へて郵送し越されたる由。

高田青年會 曩に記載したる高田青年會は去一日の例會に於て左の如く議決しいよ／＼大運動に着手する旨清水源職より報あり（前號に深識とせしは誤り也）。

一 廢娼論は高田青年會の名稱を以て唱導すること
一 廢娼事任委員五名を撰擧すること
一 廢娼運動費用として一ヶ月金若干を支給すること
一 廢娼論の方針は本會の意見縣會の採用を得るの即日娼妓を解放すると云ふに非ずして樓主の迷惑損害を招かざる樣に運動すること即ち
（一）新に雇入るゝを禁止すること
（二）從來の娼妓は其年限に至らば直ちに解放すること
（三）解放後糊口に苦むものなき樣盡力すること
一 廢娼論唱導の方法左の如し
（一）演說勸告を以て廢娼の輿論を作ること
（二）縣會議員新聞記者有志家敎師醫師官員等に勸告して賛成員たらしむること
（三）印刷物配布のこと
（四）東京、上毛及本縣下の同志と通信聯合を圖ること
（五）他青年會に勸告して廢娼の唱導を促すこと
（六）時宜を見計ひ縣會に建白すること
（七）時宜を見計ひ廢娼賛成部會を設くること
（八）本會の意見を時々新聞紙に投書すること
（九）本縣下の廢娼よりして全國に普及すること

女報

●**皇女御對顏** 去廿七日は房子內親王周宮殿下御降誕後三十一日目に當らせらるゝを以て午前九時三十分青山御產所を御出門御養育掛佐々木高行氏附添ひ奉りて宮城內なる賢所へ御參拜の上天皇、皇后兩陛下へ始めて御對顏あらせられたる由。

●**東京養育院** 去る廿六日鹿鳴館に於て第四回東京養育院夫人慈善會々長副會長定議委員の撰擧會を開き會長には高崎男爵夫人、副會長には澁澤夫人、定議員には橋本夫人、穗積夫人、大倉夫人、渡邊夫人、高崎夫人、梅浦夫人、松本夫人、益田夫人、小島令孃、青地夫人、三島御母堂、銀林夫人、渡邊夫人、三井夫人、澁澤夫人、伊東夫人、喜谷夫人、田中夫人、伊達令孃の諸氏當撰せり而して同會は四月十一日より三日間上野櫻ヶ岡華族會館に於て開會する由。

●**岩村都子** 岩村農商務大臣の令孃都子は麴町區長大河內正質氏の令息と結婚の約整ひたり。

●**ブラックストン、ヒックス女史** 英京ロンドンの名醫ブラックストン、ヒックス氏の令孃は一昨年我國に來り麻布永坂町香蘭女學校に居られしが病氣の爲め去月八日歸國せられたり。

●**櫻井女學校附屬幼稚園** 下二番町に在る同園は此度實際櫻井女學校より分離し渡瀨寅二郎氏の夫人專ら之を擔當しミス、メリケン之を助け外に數名の保姆ありて三月一日より開園せらるゝ由尙ほ追々幼稚保姆科をも設置せらるゝと云ふ。

●**同じく尋常小學校** も亦た右渡瀨夫人の擔任することとなりいよ／＼擴張せらるゝ由。

●**婦人衞生會總會** は去一日に開き自今雜誌は每月一回づゝ發行することに議決したる由なり。

●**竹村女史** 國民新聞社にて婦女子に關する事件の探報を爲さるゝ竹村女史は何人ぞと問合せの方多し、女史は大坂梅華女學校の卒業生にて國民新聞主筆竹越與三郎氏の夫人村子氏の事なるべし。

●**男女共學の學校** は佛蘭西全國を通じて一万九千五百六十四あるよし。

●**女職工の協會** は倫敦丈にて十三あり、其中尤も強大なるはマッチ製造者の組合にて一昨年七月に設立し現今七百六十人の會員あり、尤も古きは本綴の組合にて會員二百人あり。

●**大學卒業女生會** とも云ふ可きものはカーレヂエート、アルム子と稱し米國にあり、會員現に一千〇七十名にて所々に散在せり、英國にも佛國にも獨逸にもブルマにも支那にも日本にも。

●**大學女醫學生** は現今チウリッヒの大學に二十二人、倫敦には四十八人、パリには一百八人、內八十三人は魯士亞より、十一人は英國より、七人は佛國、三人は米國より、二人はアウストリアより、ロウマニア及トルコより一人宛來學し居る由。

○週報

○**官令** 去る廿五日勅令第十七號にて市町村制をして徵收せしむる國稅に關する件を裁可公布せらる●廿七日詔勅を以て貴族院令並に貴族院伯子男爵議員撰擧規則及貴族院多額納稅者議員互撰規則を本年より施行する事を命ぜらる ●廿八日法律第十三號にて通用を禁止したる貨幣紙幣の引換に關する件同十四號にて整理公債に關する特別會計設置の件を裁可公布せらる●三日法律第十五號を以て陸軍刑法中改正追加の件を公布せらる同日勅令第十八號にて第三回內國勸業博覽會事務局舘制中改正の件を裁可公布せらる。

○**宮廷** 皇太后陛下は廿六日熱海へ行啓あらせられ皇后陛下は御送として新橋停車塲へ行啓あらせられたり●二十八日天皇陛下樞密院へ臨御。

○**政治** 廿五日內閣會議に山縣、西鄕、山田、後藤、松方、大山、榎本、青木、岩村の各大臣登閣せり●廿八日自由黨本部にては會議を開き運動の方針を議したり●廿八日各大臣は登閣して會議を開き天皇陛下にも親臨議事を聞召したり。

○**外交** 伊國公使は去る廿六日外務省へ出頭して青木外務大臣岡部次官と談話を爲せり。

○**銀行** 廿五日同盟銀行は坂本町銀行集會所に總會を開けり。

○**會社** 商工會は去る廿六日定式會を開けり●二日商工會にては幹事會を開き丹羽雄九郎氏の定議案に就て協議を爲せり。

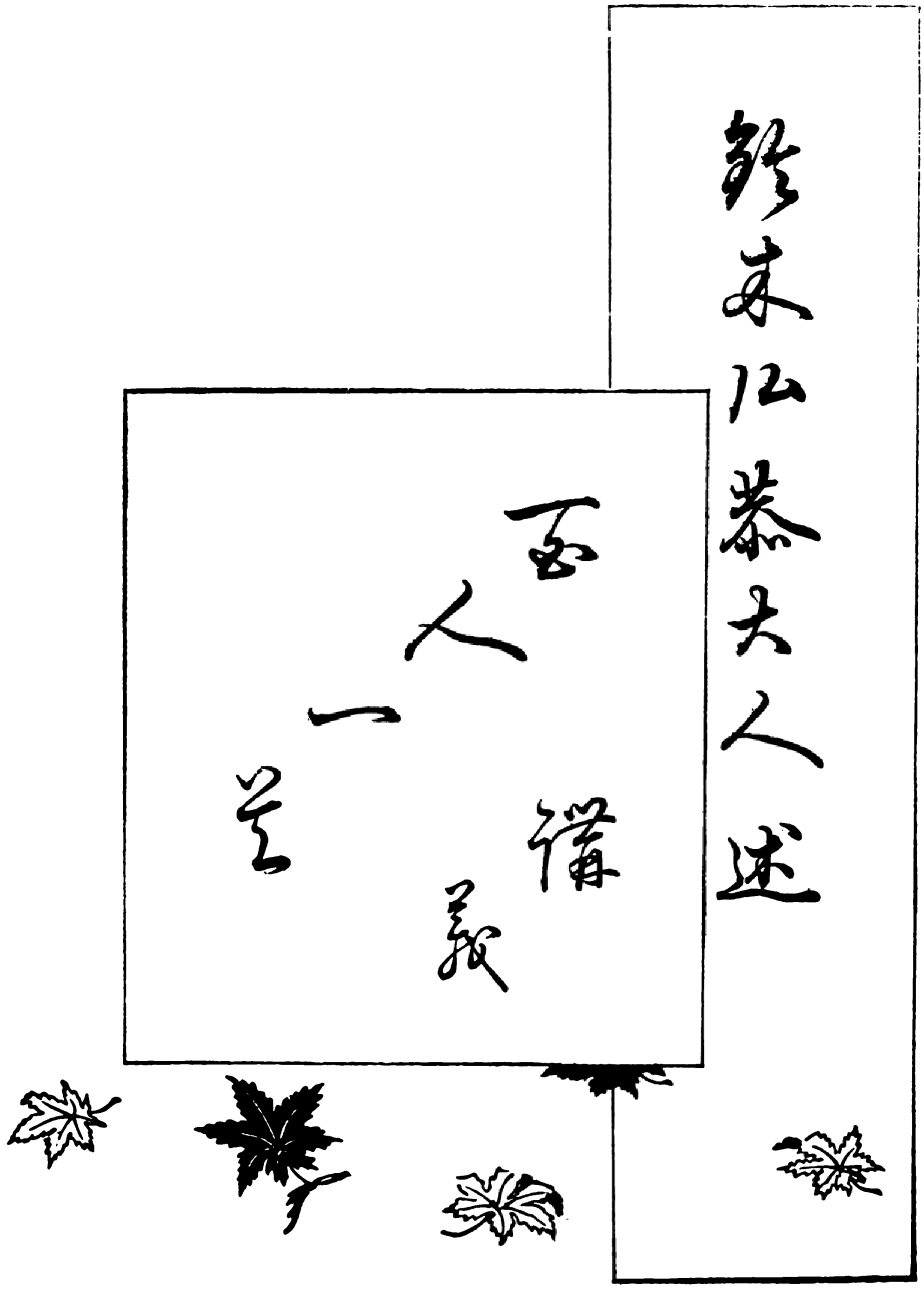
○**新誌** 姬路新報は二十四日發行を停止せらる。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新版十三日より賣出

上製美本五十錢○並製本裝卅五錢

郵稅四錢



年中一日も休刊なし

國民新聞

●特に婦人の讀者に告く

國民新聞は婦人の愛讀す可き唯一の日刊新聞なり

國民新聞は紙面潔白文字平易議論公平にして記事周到實に家庭の好伴侶たるべし

國民新聞には婦人の爲め小兒の爲等に面白くして有益ある文字なり

國民新聞は女子敎育に關しては甚だ寛大熱心なる傾向を有す

國民新聞は總ての婦人問題に關しては誠實なる研究者たり又說明者たり

國民新聞には女學校の摸様、有名なる婦人との對話、泰西に有名なる婦人の傳記、婦人に關する會合演說等の記事あり

國民新聞には時事風俗、風景に關する久保田米仙氏の風韻ある巧妙の繪畫あり、又時々家庭快樂の種子ともなるべき滑稽諷畫を挿む

國民新聞は其他政治文學社交、經濟等の問題に到りては國民新聞獨自一己に特色なり而して一に皆な人情、正義、幸福等の觀念を以て一貫す

國民新聞の代價は一枚一錢五厘一ヶ月三拾錢なれども學校生徒（學校宛に送るものに限る）には特別に一ヶ月二拾五錢にて發送すべし（地方は毎號郵税五厘
●特に婦人の讀者に告く
發行所
東京京橋區日吉町四番地
國民新聞社

米國醫學博士サンカー著
土屋柳平譯

萬國娼妓沿革

上等洋裝
紙數二百
三十餘丁
正價金四
拾五錢

娼妓廢スベキカ將タ存スベキカ請フ之ヲ本書ニ參考セヨ抑モ廢娼ノ論ハ古ヨリ之レアリ其實行ニ當リテハ禁錮罰金ハ言フモ更ナリ耳ヲ切リ鼻ヲ削リ或ハ毆殺シ或ハ焚殺スル等ノ酷刑ヲ科スルニ至レリ然ルニ今日猶ホ各國其跡ヲ絶ツ能ハザルモノハ何故ゾヤ請フ之ヲ本書ニ參考セヨ

本書ノ記事ハ猶太、希臘、羅馬、小亞細亞、埃及、露西亞、意太利獨逸、佛蘭西、英吉利、及亞米利加、等ノ各國ニ就キ其制度勿論上ハ王侯ノ品行ヨリ下ハ淫賣者ノ實情ニ至ル迄凡ソ世ノ警戒トナルベキ事柄ハ擧ケテ漏ラス所ナシ故ニ歐米裏面ノ事情ヲ探ルニハ屈强ノ材料ナリ

本書ノ目的ハ行政、立法、司法ノ高等官、代議士及實業者ノ參考ニ供スルニ在リテ尚モ**青年子弟**ノ愛讀ヲ希ハス從テ出版ノ部數モ甚タ多カラザレハ速ニ御注文アランコトヲ乞フ

本書出版以來非常の喝采を博し殊に各新聞社の好評を受け一層の愛讀者を增加したり初版部數も僅かにつき迅速御注文を乞ふ

讀賣批評　万國娼妓沿革は米國醫學博士サンガー氏の原著にして History of Prostitution といへるを土屋柳平氏が抄譯して輿論社これを發兌せり廢娼？存娼？甲論乙駁世議紛々たるの今に際して此書を公にせられしは時節がら必讀の書といふ可し猶太埃及希臘羅馬の諸邦より說き起して佛伊英米に及ぼし淫賣の原因結果救治策取締法など網羅して心切なるものなり娼妓の二字を見て無益の文字と輕々に看過することなかれ記事は確實明密にして時節がらふらぬもたしかに一讀の價値あるなりましてや廢存論未定のさきに於てをや

東京神田雉子町　輿論社書店

ゆにてりあん

第一號目次

三月一日發行

◎**社說**○○發行之趣旨……………………

論說ユニテリアン敎は一の宗敎あり（ヘンリー、ダブリー、ホークス）○ユニテリアン敎は一の社會力あり（アーサー、メーヽナップ）○ユニテリアン敎は一の道德力なり（クレー、マックコーレー）

祝詞ユニテリアン主義なる雜誌の發刊を祝す（加藤弘之）

寄書ユニテリアン雜誌に寄す（福澤諭吉）○ナップ君の雜誌發行に就き一言す（中村正直）○ユニテリアン雜誌刊行に就て（杉浦重剛）

言行錄トクトル、チヤンニングの小傳（C.M.）

雜錄上帝を信するに敢て不條理なるにあらず○道德の社會改良に於ける關係○女子高等敎育○加藤博士の疑義○慶應義塾とユニテリアン敎○癩病の再發

◎其他**雜報數十件**○○……………

◎本誌は毎月一回發行一冊前金七錢半ヶ年分同卅九錢一ヶ年分同七十二錢○市外は郵税一冊ニ付五厘を要す（都て前金に非れば送本せず）○郵便爲替は東京芝口郵便局へ御振込を乞ふ○見本を望むものは五厘郵劵十五枚御送付あるべし

發行所　東京々橋區八官町十七番地　**惟一社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日本評論

第二第四土曜日發行　定價一部六錢
十二部前金六十四錢　廿四部一圓廿錢
東京市外ハ一冊ニ付郵税五厘申受ク

日本評論ハ政治宗教文學經濟及ビ社交上ノ事物ニ關シ最モ正大獨立ナル意見ヲ開陳シ凡ソ眞實ヲ愛シ自由ヲ貴ビ獨立ヲ重ンジ進歩ヲ圖ル士人淑女ノ好伴侶タルベキ雜誌ナリ○島田三郎巖本善治井深梶之助大井憲太郎中江篤助落合直文三上參次德富猪一郎押川方義小崎弘道三宅雄次郎朝比奈知泉長谷川辰之助平岩愃保尾崎行雄高田耕安吳文聰大西祝嶋地默雷宮部金吾水野遵高橋五郎柴四郎門野幾之助等ノ諸君ハ時々本誌ニ寄書セラレンコヲ承諾セラレタリ

今ヤ政黨ノ問題將ニ活潑ナラントス本社ハ世人ヲシテ各黨ノ主義性質ヲ知ルノ便ヲ得セシメンカ爲左ノ諸君ニ左ノ若キ論題ニテ寄稿セラレンコヲ乞ヒ已ニ其承諾ヲ受ケタリ但シ號ヲ追フテ之ヲ掲グ

何故ニ余ハ大同關結ノ主義ヲ執ルヤ　大江卓
何故ニ余ハ自由主義ヲ執ルヤ　大井憲太郎
何故ニ余ハ改進主義ヲ執ルヤ　尾崎行雄
何故ニ余ハ愛國公黨ニ屬スルヤ　植木枝盛
何故ニ余ハ保守黨ニ屬スルヤ　未定

日本評論第一號ハ三月八日ヲ以テ發刊セリ其目次左ノ如シ

●日本評論ノ發行○今ノ文學●論説○國家ノ大計施政ノ方針(大窪紀)●特別寄書○祝詞(板垣退助)○何故ニ余ハ大同關結ノ主義ヲ執ルヤ(大江卓)●雜説○京上謡(殘花生)○たそかれ(夕川安宅)○詩人ブローニング○平凡ノ訓誡(白眼逸人)寫眞文學(土岐玄)○馬琴翁ノ夢想兵衛○眞實ナル疑惑○大家ゲーテノ迷信○近時教育法ノ誤謬○資本家ト勞力者ノ調和○英國新聞記者ステッド氏(一劍生)○ゆにてりやんヲ讀ム●時事○憲法論ト解釋論○貴族院ノ豫算權○驢馬豈靑艸アルニ泣カンヤ○米價騰貴ト犯罪○おくもがな○家屋建築條例○乞フ先ヅ戸締ヲ嚴重ニセヨ、庖厨ヲ淸潔ニセヨ○人民ハ何ノ爲ニ營業スルヤ○兌換劵ノ增發○戀スルハ戀セサルニ愈レリ○其他數件●世論ノ栞●要報●落穗●廣告

注意　本誌ハ前金ニ非サレハ發送セス
東京市麴町區三番町十番地　日本評論社

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に涉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の敎員孰れも熟達善良なり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地
東洋英和女學校

生徒募集

本校定期試驗畢る寄宿通學とも入學を許す

小石川柳町廿七番地
私立 跡見女學校

通信女學 講義錄 第三卷

三月十日出版
價金三十二錢
全國一般無郵税

東京麴町區富士見町二丁目一番地
女學雜誌社

發行所　東京麴町區富士見町二丁目一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留　巖本善治

印刷人　東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留　森田豐

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

日本評論

第二第四土曜日發行　定價一部六錢
十二部前金六十四錢　廿四部一圓廿錢
東京市外ハ一冊ニ付郵税五厘申受ク

日本評論ハ政治宗教文學經濟及ビ社交上ノ事物ニ關シ最モ正大獨立ナル意見ヲ開陳シ凡ソ眞實ヲ愛シ自由ヲ貴ビ獨立ヲ重ンジ進步ヲ圖ル士人淑女ノ好伴侶タルベキ雜誌ナリ○島田三郎嚴本善治井深梶之助大井憲太郎中江篤助落合直文三上參次德富猪一郎押川方義小崎弘道三宅雄次郎朝比奈知泉長谷川辰之助平岩愃保尾崎行雄高田耕安呉文聰大西祝嶋地默雷宮部金吾水野遵高橋五郎柴四郎門野幾之助等ノ諸君ハ時々本誌ニ寄書セラレンコトヲ承諾セラレタリ

今ヤ政黨ノ問題將ニ活發ナラントス本社ハ世人ヲシテ各黨ノ主義性質ヲ知ルノ便ヲ得セシメンカ爲左ノ諸君ニ左ノ若キ論題ニテ寄稿セラレンコトヲ乞ヒ已ニ其承諾ヲ受ケタリ但シ號ヲ追フテ之ヲ揭グ

何故ニ余ハ大同團結ノ主義ヲ執ルヤ　大江卓
何故ニ余ハ自由主義ヲ執ルヤ　大井憲太郎
何故ニ余ハ改進主義ヲ執ルヤ　尾崎行雄
何故ニ余ハ愛國公黨ニ屬スルヤ　植木枝盛
何故ニ余ハ保守黨ニ屬スルヤ　未定

日本評論第一號ハ三月八日ヲ以テ發刊セリ其目次左ノ如シ

●日本評論ノ發行○今ノ文學●論說○國家ノ大計施政ノ方針（大逕紀）●特別寄書○祝詞（板垣退助）○何故ニ余ハ大同團結ノ主義ヲ執ルヤ（大江卓）●雜說○京上謠（殘花生）○たそかれ（夕川安宅）○詩人ブローニング○平凡ノ訓誡（白眼逸人）寫眞文學（土岐玄）○馬琴翁ノ夢想兵衛○眞實ナル疑惑○大家ゲーテノ迷信○近時教育法ノ誤謬○資本家ト勞力者ノ調和○英國新聞記者ステッド氏（一劍生）○ゆにてりやんヲ讀ム●時事○憲法論ト解釋論○貴族院ノ豫算難○驢馬豈靑艸アルニ泣カンヤ○米價騰貴ト犯罪○おくもがな○家屋建築條例○乞フ先ヅ戶締ヲ嚴重ニセヨ、庖厨ヲ淸潔ニセヨ○人民ハ何ノ爲ニ營業スルヤ○兌換劵ノ增發○戀スルハ戀セザルニ愈レリ○其他數件●世論ノ栞●要報●落穗●廣告

注意　本誌ハ前金ニ非サレハ發送セス

東京市麴町區三番町十番地　日本評論社

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に涉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす每科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地　東洋英和女學校

生徒募集

本校定期試驗畢る寄宿通學とも入學を許す

小石川柳町廿七番地　私立　跡見女學校

通信女學講義錄　第三卷

三月十日出版　價金三十二錢　全國一般無郵税

東京麴町區富士見町二丁目一番地　女學雜誌社

發行所　東京麴町區富士見町二丁目一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留　嚴本善治

印刷人　東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留　森田豐

遞信省認可